Wilson HQ
no. 413

明治十八年初刊

女學雜誌

每月廿五日發兌

第四百拾參號

要目

社說
禪の流行を論ず

女學
女生の高等修學及洋行
繼母と繼子(櫻井居士)

爛煥
凱旋將士(詩經東山講義)(麻耶山樵)
破れ衣(流水庵)
春よいづこ(幽花庵主)
枕頭清風(かもめ生)
利信櫻井鶴作氏永眠

隨感
小を懷ふ
月上り花開く
菜を送る
元良博士の坐禪
事即万事
愛の御しもさ
絕望するを能はず

新刊書
文藝俱樂部○不言不語○崇禪陣○四の緒○日本名勝地誌○なにがし○水車○寫眞帖

片々
女學操作論の反響○女子教育の發達○女子德育の顧慮○小學女教師○今後我國婦女子の心得○女學生の風評○稀有の大探檢家及び夫人○本年の米作○御門跡の婚儀○孝貞兩全の賢婦○支那最初の女醫學士○チェウノヘタコカイナ○誤り易き言語○誤り易き字音○言志の調べ○たのしきことよ○戀と禪○前田行脚の女學演說○香川高等女學校○下田歌子女史○可哀工女○佳人の死刑執行人○ホンかりー國○大坂の醜業者議員○万國婦風會大會○京都婦人手藝會○相愛看護婦會○彦根町立高等女學校○女を絕つの願掛

明治二十八年二月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百拾貳號目次

社説

來るべき一大事、一大時節

評論

神智靈覺の友に叫ぶ

教界評論の道

國家主義、世界主義

日本宗教を歡迎す

女學

女子教育十年後の化粧

女子徒弟學校

時これ壽命の說

家に歸る女學生

近時の女子教育論(櫻井鷗村)

隨感

晋にはゆるせ、神風を笑さして誇るものあり、名、歷史及び聖蹟の句、戰時武士の病　静閒子

の稚道を高雅に思の情

新刊片々

救急看護法　普通看病學　家庭理財　小清詩集

明治盛衰史　日川百科全書　楠風佳話戰事

大摺鏡　日清戰爭繪卷七卷　衣笠城　小月城

爛熳

磯の上風(俳句一百六十五首)　櫻　蜻　子

片々

◎憂國の婦人來つて訴ふ◎女子傳道論◎外人が誤解の一例(客舍の仲居を藝者と謂たむ)◎日本の婦人決して男子に劣らず—吳大五郎氏の說を駁す—◎東洋の二女傑◎卒業女學生一覽(二)◎京濱婦人大新年會の由來◎裁縫及家事試驗問題◎同志社女學校會計◎監督教派の諸婦人會◎朝鮮釜山通信◎日本女子躰格一覽表◎贊鐘◎神戸婦人報公會◎速記者個氏◎女子師範學校の養蠶◎高等女學校設立の議◎大阪の特色◎高田耕安氏の看護法講演◎場懸の女中に貯蓄心多し

第四百拾壹號目次

社説

宗教的東方問題

女學

女子教育大勢の實跡

女生普通教育

職業教育、職業的教育

評論

無息義論

望月米吉君

國家教育の名に惑ふ

隨感

血性論理(あやしき看護)義捐)古風の家庭

爛熳

博士ノースロップ先生　中村茂顯

星夜　森愛軒

山水の影　流水庵

出立の山の朝。山中の巨岩。うぐひす。

散る花。山霧。山路夕陽。山寺。

美觀婦女論　花影子

朝鮮の官妓　齋藤育作

片々

貸婦人の義捐金募集/第三回女子夏季學校(埼玉縣公娼廢止問題—朝鮮婦人親切の留學生)(保姆講習會計畫の高等女學校設立の議/女子[illegible]師範學校　內地婦人後援會◎長崎保姆教育會所　[illegible]婦人[illegible]會(○)女教師紅梅女色[illegible]相公[illegible]結婚時期[illegible]女の文(○)女羽衣[illegible]美談(○)教育大會に於ける女學[illegible]問女子の教育/沖繩の婚俗/有爵婦人募集文

孤女學院特別資本募集廣告

孤女學院成立の主旨は尋常孤兒院と異なり純然女子教育の精神によりて發起建設せられたる者也。茲に創業三年の星霜を經て教育學上の進歩なみなみならず、最上級生徒の學力感ずるに足るものあり。然るに該院生計の維持は單に仁人隨時の義捐金による之を用ゐて教育上の費用に供ふ可き餘裕あらざるに付、此上一層教育上の整備を求めんに其便りを得ずさて院長は太たく心を痛めらるゝ由に聞けり。加之目今孤女の最長年者は既に十四歳に達せり其前途身を處するの道も亦た今に於て講ぜざる可らず。故に吾等同念の族、申合せて發起人となり、茲に天下の同志に計り、孤女學院の女子教育並に孤女立身の二つの事の爲に、院外の特別標榜さして資金供給の方を與へられんとを希ふ。之が爲めに定むる所の志法如左。

一　茲に孤女學院の女學及孤女立身の二事の爲に殊に資金を募集し此資金を名けて孤女學院特別資本と云ふ。

二　此資本は院兒が從事すべき尤とも安固なる事業に最初は養蠶に放資し其收益を積んで募集の主旨たる二事に限りて使用するものとす。

三　此資金及び其收益は孤女學院尋常の生計費に使用するを許さず。

四　收益の二分五厘を以て孤女の貯銀とし殘り五分を女學に、同二分五厘を立身費に充つべし。

巖本善治　石井ちか

小鹿島筆　加藤さし

田村武治　津田むめ

名出保太郎　小島きよ

古在さよ　青木まさ

中野はま　杉浦義道

義捐金取次所　東京瀧野川村　孤女學院

女學雜誌

第四百拾參號

明治二十八年八月二十五日發兌

社説

禪の流行を論ず

◎禪の流行につきて可否する聲やうやく高し、以て禪なるもの丶流行の愈よ隆んなるとを反證すべき歟。吾黨の觀る所によれば、今時の禪なるもの、多くは文學上の評判に過ぎず、二三雜誌の出版と、多少禪臭き文字の見ゆればとて、直に喫驚して天下一面の大火の如く認定するは、寧ろ笑止の沙汰と言ふべし。禪にして若し流行するか、須く其の眞諦を露はし、其の根柢に起ち、以て大ひに隆々盛々すべし。些々たる文學上の色取りに用ゐ、只だ一と時の好みに弄ばんとするの傾向こそ、即ち大ひに警振激勵せざる可らざるものなれ。何んぞ、直に禪そのものの流行を目して憂ひとすべきならんや。禪を以て邦家活潑々の經綸に不利なりとする如きは、抑も、禪なるものを知らざるの僻説なり。

◎禪の用、他なし。輕浮を離れて、沈重に入り、皮相を透して、神髓を穿ち、眼前日々の流轉に動搖せずして、人生不變の一大根本に安立し、確乎として大いに成す有らんとするが爲めの修養これ也。凡そ、此の修養や、道を學ぶものに於て、皆な無る可らざるのものとす。之ありて即はち知を行に化し、才を徳に合し、有意識を無意識とし、以て自得特達の妙域に達するなれ。左れば、佛教に於て、此の禪的修養あるが如く、儒教に於ても、神道に於ても、基督教に於ても、亦これ有り。之なきは、即はち徳教の完備せるものにあらざる也。

◎然るに、今の禪を嫌惡するものは、其の佛教的臭味あるを以ての故に因るを多しとなす。而して、此流何の故に佛教を嫌惡するやと問はば、蓋し佛教を以て、厭世教となし、活世界と相渉らずと思惟するが故なるべし。此れ眞に淺薄の見解たるのみならず、更に頗る不公平の見解たり。凡そ、如何なる宗教に於ても、之に厭世的分子の存せざるものありや。厭世

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、即はち觀教の初階段なり。先づ世を厭ふによりて、宗教に入り、宗教に熱するによりて、再び世に還る。所謂る、山に入つて亦た山を出るもの、即ち是れ也。佛教を以て厭世教なりとするものは、教祖釋迦が何故に若く弘法救世に辛苦せられしやを思へ。何んぞ只だ釋迦のみならん。苟くも、其流を酌んで、其源に溯りたらんほどのものは、誰か活世界の人々に哀れを熱して、之が福利幸安の爲めに盡瘁せざりしものやある。亦た、明代哲智にして、正法の經綸に助力したる、もしくは、大俗活潑の現事業に從ふものが、其心養を鼓に求めて初めて能く生動したるなどの例しは、古今の史傳中、明赫々の事實にあらずや。佛教、何んぞ必らずしも厭世教ならんや。

然りと雖ども、精神を失つて、形式に流るゝは、人心の常なり。佛教の末派、もとより厭世に拘泥し、活動と相渉らざるに至りしものは、太だ多し。されど、末派流弊の往々にして斯の如くなる者、獨に佛教にのみ限るものかは。儒教、亦然り、神道、亦然り、基督教も亦然り、すべての宗教みな亦然り。獨り之を佛教にのみ責むるは、事義を辨ぜざるもの也。

識者或は曰はん、單に之を佛教にのみ責めんとするにはあらず、然れども、今の佛教の特に甚しく然るを奈何せんと。されど、吾黨は斷言す、もし現に如斯き流弊に陷いりたるものを擧ぐるとせば、此れ是れ單に佛教界のみに非ず、儒教界、神道界、基督教界、皆等しく然りと。

恐らくは、識者、禪の流行を以て佛教の流行とすると勿れ。況んや、これを目して、倦怠、厭世、回顧、不活動などの標證として、唱ふると勿れ。吾黨は、むしろ禪の流行を歡迎して、而して、其の流行の進步にして止まんことを危懼するもの也。

禪の流行し來らんとするは、國民、浮泡なる大言壯語に厭き果て、結果なき名のみの改良策に失望し、事に當りて自己の大安心なきに氣着き、變化無常に心を動かすとの恥かしきを自覺し、大事は即ち大決定より生じ來るとを、模糊朦朧の間に講説して、乃ち、古人の禪定に羨み、現宗教中の尤とも床しげなるものに着目して、遂に佛林の精髓を取つて修養せんとするには至りし也耳。

故に、禪に入らんとするの傾向は歡迎すべし。是れ、日本國

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

民の通有短所を矯正すべきの傾向なれば也。たゞ夫れ、懐疑に初つて哲智に達すべき哲學書生が、懐疑を以て高尚なるものと誤まるが如き謬弊は何ものにもあり。禪は只だ一の方式にして、悟に達し道に到るの徑路なるに關せず、此の徑路に逍遙するを以て無上の榮譽の如く虚飾するものもなきに非ず。然れども、識者は、單弊を視ず、其の積極を擇ぶ。禪の餘弊に驚ろかずして、其の神分を發揮し、之をして當然健頁の功を奏せしむるは、即はち識者の任にあらずや。

◎吾黨は、禪の聲に嫌はずして、其聲の寧ろ空なるを嫌ふ。殊に、其の行はるゝとの倘ほ狹隘にして、就中、活世界の人士が未だ其の精神を學得せざるを惜しむ。試みに一例を擧んか。現時紛々たる責任論中、そもく其幾何か能く重膽謹心の吉士を動かすとを得べしと思惟するや。責任を責むるものは、亦た自から責任を知るものたるべし。試みに、彼等が文筆に言論に、放談壯語する所のものを見よ、何んぞ其の醜なる。惜しむべし、此等片々たる馬丁車夫的の雜言は、幾多耳を傾むくるの吉士をして、嫌焉として去らしむ。且夫れ、所々演説の中止なるものを聞く、中止不道理なるか、何んぞ身を挺して之を争ひ、以て之を國民に訴へんとはせざる。而も言はく、利器を奪はれて、何者をか揮はんと。嗚呼、如此き國士の利器なるものは、單に口舌か。夫れ此緊要の機會、必覺茶番狂言を以て了る。詮ずるに、國士、國士たるの決心なきが故にあらずや。決心とは、即ち、禪定の謂ひ也。もし幸にして禪機に得る所あり、所云る禪なるものゝ眞の流行、彼等國士の間に行はれなば、何んぞ今日の如き浮々泛々たる好笑の悲劇を覩んや。吾黨、安くんぞ、禪の流行を擢れん、寧ろ其の眞實に流行せざるを懼れんとす。

◎若し夫れ、禪の流行を危懼して、之を防がんとするものあるや。之を防ぐに於て、言論文筆の効力なるもの、抑も能く何をかせん。蓋し、文學上一と時の物ずきに惑溺せし俳諧などは、或は之を以て能く防止するとを得ん。何となれば、彼等の浮氣なる好みは、いと容易く轉化するとを得べければ也。左れど、苟くも、禪の傾向を眞實に防止せんとするものは、如此き浮薄の抵抗に於て滿足すべきにあらじ。禪の根柢は、決死なり、大勇猛なり。左れば、此と戰ふものは、即ち、這般の戰場に於せざる可らず。儒神、もしくは基

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

督教界の人士にして、今の禪なるもの丶流行の佛的なるに嫌惡し、之を譏へして以て自己が健全なりと信ずる方向に轉ぜんと欲せば、當に先づ佛的禪に打勝ちて余力あるの大安心を實行に以て顯昭し、非凡の覺悟と、決死の大勇猛とを以て、之に臨むべし。凡そ、篤道の士が道に歸するは流るゝが如し、苟くも優れたるものあらば、過るが如くして歸せんとす。左れば、儒家、もしくは基督教界の人士にして、實地に於て深く修むる所あり、實行に於て優れて殺ゆる所あらんには、今の佛的禪に歸しつゝあらんとする所の好道の士は、爭つて之に過らん也。何んとなれば、彼等が求むる所の熱情は、彼等をして巧裁に拘泥せしむるを許さず、其の尤とも堅固に、尤とも優勝せるものありと聞かば、則ち之に吸收せられざらんとするも何得ざるべければ也。左れば、禪的流行は、あらゆる宗教界の等しく歡迎すべきものならずや。之を歡迎せざるは、小賢、嫉妬ありて、自信實力なき宗教界の只だ爲す所也。何んとなれば、宗教心の發動流行を、宗教界が歡迎せざる理由なければ也。

◎識者或ひは、今の形勢を視て民心の倦怠となし、而して、禪の流行を以て此倦怠に由來すとなす。夫れ、我民心の倦怠し易きは、アングロ、サクソン又は支那人などが倦怠するとの遲きと相似ざるは事實なり。抑も倦怠の遲速何れか可なる、此を評騎するとの必らずしも容易ならざると共に、如此き遲速を邦家人心の全體に及ぼし來せる國習の淵源は、實に頗ぶる悠遠なるとを知らざる可らず。而して、もし之を矯改するの方法ありとせば、則ち、禪的修錬の如きは、尤とも勢力ある手段の一たるべし。何んぞ汲つて之を目して倦怠の證標となすや。

然りと雖ども、禪をして枯木死灰に陷いらしめず、其の禪界より遊びきて、巷路に出でしめ、其出世間の大決定を用ゐて、世間の活事業に施行せしむると否とは、即ち是れ禪的先導者の遂行運爲いかむに關はる。眞に是れ靈界大先師の責とする所にあらずや。見よ、禪の流行は、輕調なる文藻を以てして能く防止すべからず、只だ健全有力にして活火あり熱誠あり慈悲あり經綸ある禪的先覺の能く利導するに至て、初めて之を善くすべし。故に、吾黨は、禪の流行を歡迎して、但だ其の輕浮ならんとを憂ひ、一紙もつて烈火を防がんとするの無

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

劾を知つて、心ある人士が挺身妙達、以て能く之を善導せんとを祈るもの也。

女學

あまのかる藻に住む虫の名はきけど、
たゞわれからのつらきなりけり。

女生の高等修學及び洋行

米國女子大學に榮譽ある卒業を遂げて、近頃ろ恙なく歸朝せし女學士某等の談ずる所を聞けば、米國にあつて大學に入學する女生年々に增加し、其卒業生の世に出づるものも頻々として澤なり、然れども、其の大學にある女學生と親しく交はり、彼人々の精神理想などを聞くに及んでは、意外の歎なき能はず、凡そ眞に高等教育に執心し、學問の攻究に熱意するものなどは、至つて少數にて、他は大率、何の主旨もなく入學するものなりとぞ。

吾黨之を聞きて喟然として歎じて曰く、盛んなる哉、米國女子教育の進步や、社會が女學を待するの程度もつて知るべき也、熱意なく、何の主旨もなくして、而して大學に入校する女學生の多きほどに女子教育界は發達せしか。顧みて、我國の現狀を惟ひ、嗟歎禁ずると能はず。政府が高等の名を冠らせたる高等女學校なるものゝ程度の如何に低きかを見よ。民間に於ける女子高等普通教育の何如に貧しきかを見よ。而して、此等を卒業して熱意愈よ燃え、更に進んで高等教育を受けんとする女生は、其の數多からざるに非ず、其精神熾んならざるに非ずと雖ども、但だ之が望に應じて其教育を施すべき適合の場所なきによつて、彼等の多分は則ち皆な躑々然として躊躇しつゝあるに非ずや。且夫れ、單に教育の場所なきのみは、尙ほ忍ぶべし、社會の之を酷遇するに至ては、殆んど堪ふ可らざる也。女學生の高等教育を慕ふものあれば、社會は之を雛子の如く待遇し、其の不撓卓立の躰を見ては、成るべく速かに挫けんとを待ち、殆んど探偵を附け置く如き注意を以て斷えず之を疑察しつゝあり。女學生たるもの豈に英氣を喪はざるを得んや。

多謝す、堅忍不拔の女學生、能く此等の冷遇に堪えて、孜々

もして晩近數年間の暗黑界に攻學し、確乎として能く其守る所を守りたるとや。惟みるに、風雪ことさらに烈しくして、則ち松栢の堅きを爲す。日本新女學界の率先者として、堅忍不抜の先蹤を得んが爲めには、一と度此の數年間の逆境を作りて、以て其の眞僞優劣を淘汰せざる可らざりし也。天、幸ひにして、第一紀に此の不遇を來らし、以て尤者を鍛錬せしめ、其の神品を堅牢ならしめたる乎。

今や幸ひにして、一陽來復の東風を迎え、女學の春草到る所に萌えんとす。正に是れ多年の辛苦を慰さめ、其の鬱屈を伸すべきの秋なり。希はくは、實際に女子高等教育の敷地を完備し、彼等諸氏が熱望を滿たすの便利あらしむるを得ん。彼等諸氏の筋骨は久しく勞せられたり、彼等諸氏の心膽は相應に練られたり、正に之に高等の智識を授け、其の學的嗜慾を滿足せしめ、妙に智徳兼備の女學士たらしめて以て新日本新女學の爲に、價値ある先蹤たるとを得せしめよ。

且つや、吾黨は、今の男學士の間に洋行留學の餘りに有益ならざるとを公言するに相反して、今の女學生の間に、可成多く洋行留學するもの丶增加せんとを勸告するもの也。明治二

十八年の日本女學界は、明治十一二年の日本男學生の社會に比すべきか。今に於ては、可成く多くの女學生が、海外に遊雄飛遊學せんとを可とす。其益たる、單に一身の上に生ずるに止まらず、施して女界一般に及ばんとす。其結果の實際に益を奏するのみならず、其の影響感應すら、既に甚大なるものあらんとする也。

羨やむべし、米國の女學界、何んぞ其の潤大にして殷富なるや。之れ其の富に關するものあり、之れ其の社會の組織に關するものあり、之れ其の歴史に關するものあり。凡そ此等のもの今の米國の特有する所にして、直ちに他邦の採取するとを得ざるものありと雖ども、抑も、女子教育界の先導者(教ふる者及び學ぶものの先導者)にして、不屈不撓、非凡絶倫の忍耐熱力だにあらば、今の女學界を激進して、大ひに燦乎たるものとならしむるは、至難の事にあらじ。之れ與に先導者の責にあらずや。

繼母と繼子

橙軒居士

小序

痛ましきは、繼母と繼子との間柄なるべし。なまじひに、母子の緣を結びたればこそ、諸種の不吉、速々として横がり生ずれ。假りに、彼等をして他人ならしめよ、多く得がたき慈悲の婦人にして、頑是なき無邪氣の小兒なるべし。左るを、何の緣しありてか、殊野の運命に結ばれ、最と聖なる名を取つて、人生最とも温かき義の型に同住し、之よりして、情を殺ろし、心を鬼にして、悲慘の痛劇を演ずるに至る。不運の初歩は、痛ましき義の名を取りたるに根づくとや言はんか。嗚呼、道德の粋は、其名に存せずして、其實にあり。罪惡の惡むべきは、其形にあらずして、其の意にあり。讀む人もし此文の叙事によりて、まゝしき母子が如何にして不吉の間柄となりゆくやの因緣を察知せば、虚名の益なく、罪過の憫れむ可く、人生の最と不可思議なるとを覺知して、覺然として、悟る所のもの多かるべし。余は、多數不幸の繼母及び繼子が眞情を代言し、之に同情を寄せしむるものの、此文に過るものあらざるを信じ、敬意を表して、其の公刊に序するもの也。

明治二十八年八月

巖本善治識

世に善人も稀なれど、惡人も亦稀なり。慈善會、育兒院、貧民救助、と大騒をなし、巨額の金を惜しまぬ慈善家が、泣寄りの親族には眉根を顰むる世の中なれど、强盗が荒仕事の歸るさ、投身を救ひし例も亦珍らしとせず。いかに繼子を惡み、聞くにも堪へぬ殘酷の事をなす繼母とて、何の因緣もなきに、無闇に罪のなき幼稚き小兒を惡まんや。犬でさへ尾を振つて來るときは、頭顱の一つも撫でゝやりたくなるものぞ。鳥でさへ、ポンと手を拍たば、チヽヽと飛で來る程に馴れなば、千金にも換へがたく思はるゝものぞ。況して萬物の靈たる人間の子に、緣あればこそ、御母樣〳〵と呼ばれて見れば、繼子とて何惡からう。緣日參詣の歸途、女の兒ならば花簪、男の兒ならば鉛筆の一二本、浮世に對しての外飾でなく、眞實の心から買ふて來て喜ばせたい位の情は、高利貸の女房にでも確にあるなり。然るにこゝに恐しき緣由ありて、非常の大德ある賢女の外は、この優美なる尊き人情いつしかと消え果つるこそ悲しけれ。緣由とは何ぞ、自身の廻氣と世間の陰口是なり。

かや〳〵と口うるさき浮世の中を高踏濶歩して、毫も世評に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

介意はざるは、堂々たる丈夫も困難しとする所、況んや當世普通の婦女子に於てをや。かうしてはかう思はれはせぬか、彼様しては彼様言はれはせぬかと無益に氣を揉み。誰がかう言ふたの、彼様思つてるに違ひないのと、獨で腹を立てるが如きは、勇氣と度量に乏しき婦女子の通弊なり。されば繼子に對しても、種々に氣を揉み、樣々に氣を廻はして、不快を感ずるに至るは、人並はづれたる馬鹿女と、非常の賢女の外は免る能はざるなり。況んや實際彼方からも此方からも、五月蠅く陰口を言はるゝに於てをや。

而して何事をなすにも、少々の失策は誰にも免れず。殊に兒童教育の事の如きは難中の至難なるものにして、いかなる女丈夫といふとも人間の力のみに依頼すべきにあらず。こゝに愛といふ奇き神ありて、其一擧一動を指揮したまふを以て、辛うじて其任務を果し得るなり。まして當世普通の婦女子にして、何ぞ能く此大任務を完全に果し得んや。然るを探偵が罪人を視る如き眼を以て、他より之を視て居り、彼是と五月蠅く非難せられては堪つたものにあらず。是に於て其天性の廻氣は愈 増長し、遂には彼の神の指揮を受けず、他人に悪く思はれまい、言はれまい、といふ卑しき心に支配せらるゝに至るを以て、神聖なる彼の神は其不淨を厭はせたまひ、何時しかに其胸を去らせたまふなり。

若しこれが實の子とか犬とか鳥とかならば、例令何の樣にするとも、他人も彼是言はず、自分も氣を廻はすに及ばず、無邪氣に處置するを以て、彼の神は樂で其間を調和し、努めて冥助を垂れたまへど、義理ある子となりては然は行かず。少し嚴にせば、繼母なればと、他人も思ひ自身も氣が廻はる。さればとて甘やかしてはかりも育てられず、と言つて他人に彼是言はるゝも厭なり。心配だ／＼と注意に注意を加へても、人の口に錠は附かず。少しの事にも尾に鰭をつけて、仰々しく言ひたてられるを聞ては腹が立ち。それが段々度重りては遂に反動を起して、エ、儘よといふ氣にもなる。さうなると落度は愈々多く、陰口は益々甚しくなる。隨つて反動は愈々益々激しくなり、ツヒ／＼其子までが可愛氣がなくなるに至るなり。既に斯く愛神の冥助を失へる身を以て、育兒の大難事をなさんと欲す、其結果知るべきのみ。

繼母と自身の胸に、かゝる事情があらうとも夢さら知らぬ無

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

邪氣の小兒は、少し可愛がると直につけあがり「母ちやん、お菓子が欲しい、玩具を買つて、あれは厭、それも厭、あんなの欲しい」「あんなのはね今無いのだからね、母ちやんが又後に買つてやるからね、好い兒だ、これで我慢おしね」「厭だ厭だ厭だあー」と母親が何か用をして居るとか、考事をして居るとか、又は氣が勞れて居る時にも、遠慮なく袖に縋り肩にとりつきて泣きむづかり「エ、解らない後刻におしなねえ、五月蠅いてば」と實母ならば叱るところもヅッと怺へて、愛相よく機嫌をとるが如き事は、女なればこそ出來るなれ、男には出來ぬ事なり。然れどもこの氣苦勞が、知らず〳〵の間に、他人的感情を增長せしめて、其愛情を失ふべき一原因ともなるなり。さればとてこの辛抱をせぬ時は、其爲す所、實母と聊か異る所なくとも、他人は然樣と思はず。近邊の女房どもには、繼母なればと、好くは言はれず。これが亦其愛情減殺の一原因となるなり。

而していかなる謹慎深き女なりとも、長い月日の間には右の辛抱をツヒ〳〵せぬ事もあるべし。まして普通一般の婦女子は、大抵この辛抱をするものにあらず。此場合にして若し姑

など其邊に居合はさば、其姑「そんなに慳貪に言はないでも厭なら厭と優しく言ふが宜い」と縱令直接に言はずとも口の中で獨言の樣にいふか又は目色に言はせて「サア妾が好いのをやるよ待つてお居でよサアこれが好い〳〵」と態と優しく言ひ「こう優しくさへすれば此兒だつて直に解るものを」と、聞えよがしの獨言を言ひなどすることもあるべし。而してそれを嫁が何とも心にはさまずば宜けれど、女の心弱き胸へは、必ず針刺す如くに思はるゝものなり。さて又其不快を、嫁が其處だけでをさめてさへ置かば、何事もなけれど、そうは出來ぬが婦女子の天性にて、いかなる謹慎深き女にても、極仲善き一二の人位には、不平話をせずには居らず。すればそれが口善惡なき女どもの口から口へと傳はり〳〵て、果は姑の耳へも入らずに居らぬが當世の常態なり。入つては姑も亦腹を立てずには居らず。立てては根が他人にて且つ女なれば直接には得言はず。嫁が些細の失策にも、尾に鰭つけて、近所近邊ふれまはし、犬の糞の復讐をするものなり。さて又それが廻はり〳〵て、嫁の耳へ入ると、「フン義理ある子と思へばこそ、是程に氣苦勞をして居るに、大事にすればつけ上る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

そんなに言ふ位なら對手にするが宜い」と口へ出して僻言は口人も、僻言はねば僻ずは口丈尚餘計に腹が立ち、自然に其見までが可愛氣が無くなり、與らうと思つてしまつてありし菓子も、ツヒ〳〵近所の子供に與つてしまふ氣にもなるべし。そうすると、それが亦姑の蔭口の種となり、其蔭口が亦嫁の蔭口の種となり、終局は繼子に對する嫁の愛情を滅殺するに至るなり。

互に斯く雙方面白からず思ひはじめては、止め度なく面白からずなりまさるものにて、姑は嫁に對する意地よりしても、孫が餘計に可愛くなりて、無性矢鱈に可愛がり、一寸其兒の泣聲がしても、早、嫁が何うかしたのではないかと邪推し、遂には嫁を鬼か蛇の樣に思ひなし言ひなせば、嫁も亦「何もあんなに可愛がらずとも好い事を、妾が何も彼の兒を憎むのではありやあしまいし」と妙な邪推をなし、其邪推と邪推が常に衝突をなして、彌々其惡感情を增ふに至るものなり。而して凡て子供の守には、暇ある隱居に托するが普通なれば、其子は繼母より祖母に親炙するのみならず、一方は甘やかし、一方は他人根性を以て扱へば、自然に祖母の方に懐き、人に「母ちやんが好いか祖母ちやんが好いかえ」と問はれなどせば「祖母ちやんが好いの、母ちやんは坊をいぢめていけないの」などと何處で聞覺へてか答ふる樣にもなるべし。そうすると、嫁はそれを姑が敎へしかの樣に邪推し、意地よりしても益々其兒を可愛がらねば、其兒も亦益々懐かず。且又祖母に連れられて行く所毎に、繼母の恐いといふ事、恐しいものといふ事を、幼稚き耳にも聞覺えて、繼母に對して追々他人氣を出して、駄々も捏ねず、顏色を伺ふて物を言ひ、何處からか到來の彼の菓子一つ欲しいと思ふても、ねだり得ず、指を啣へて祖母の歸りを待ち、又甚しきに至りては、繼母が何か與うと言つても、ウヂ〳〵して居て容易に受取らんとせず、祖母の指揮を俟つて漸くに手を差出す程になるさへあり。斯うなつて來ては、既に害ひはじめたる感情彌々面白からず「エ、小癪憎い」と、ツイ〳〵思ふに至るも、聖人ならぬ身には、強ち無理とは謂ふ可からず。

これしきの事は尚可なれども、子供によりては、其惡癖を繼母に叱しとめられて居る時などに、偶然其處へ入り來る祖母の顏を見て、フト悲しくなり、ターンと其膝に泣きかゝる如

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きもあり。又は祖母が其近邊に居ると思ふときは「そうしてはいけません」と、一寸手を引つぱつた位の事に、キヤーッと非常の聲を發して、泣きさけぶ如きもあり。か丶る時、姑が事情を察して、程よく處置せば事は起らねど、大抵の姑はそうはせず「何うしたんだねえまあ、吃驚するじやないか、エ、只手を引つぱつた位の事で、彼んな聲を立てるものかね、オオどうした〳〵、エ、母ちやんが何うしたと、其代り祖母ちやんが負つてやるからね、泣かないで御默り」と嫁を尻目にかけてツイと出て、仲善しの婆さんの家などへ行き「今もこれ〳〵でございました、幾等此兒だつて、ねえ貴女、只手を引つぱつたばかりで、彼んな聲を立てるもんですか、それはそれは貴女、ひどい聲なんですよ、キヤーッといつて近所近邊響き渡る程なんですもの、妾は又何うしたのかと思ひました、此兒は小供の事ですから、何も言ひませんけれど、彼れで見ると平生妾が居ない時には、何んな事をして居るか知れやしません、エ、母ちやんが何うしたと、オヤ〳〵此處を其うかへ、オヤ〳〵まあこんなに創になつて居ますよ、貴女これ御覧なさい」と、先刻其兒自身で悪戯をして附けた創を、

疎に問ふても見ずに、早合點でそれにしてしまひ「マア是ですもの妾が默つて居られますか、オホヽヽ何も貴女に憤怒つたつて、仕様はありませんが餘りですからねえ、それに妾が八釜しい事は、いやなんのかのと、そんな事が能く言へた事ですねえ、貴女ね、過日もね、マア呆れるじやありませんか、かうなんですよ……」など丶一二時間も饒舌つて歸るが如き姑珍らしとせず。讀者若しか丶る場合の嫁の位置に、身を置かば如何。隨分辛い事ならずや。「何だつてマア彼んな聲を出すんだらう、知らない人は何と思ふか知れやしない、それかといつて問ひもしないのに分疏も出來ないし、本統に厭な兒だ、何うしたら宜からう、母さんだつて餘りだ、何もあんなに言はなくつても宜さそうなものを、又何處かへ行つて有る事無い事饒舌つて居るであらう、口惜しい」とは思へど、マサカニ立聞にも行けず、燃ゆるが如き胸のウヤムヤ治まらず、遂には何處かへ訴へて行かずには居らず。而して其訴へを聞く人も、多くは女なれば默つては聞かず。中には隨分輕薄なる奴ありて「そうですかマア、本統に貴女は御可愛相ですのねえ、それにね、貴女、これは此處だけの談話です

がね、あのこんな事を言つてましたよなど、姑が言ひし事の又聞に、輪をかけて語りなどして、合槌を打つもありて、其不平は益々火の手を加ふるとも減えはせず。膝乗り出して並べたてる不平の數々、何時しか姑の耳へ入ると、姑も亦意地を増すといふ點になつて來ては、嫁の口惜しさ絶ゆる時なく、其お向家の誰れが斯ういふたの、御隣家の誰れが彼様いふたのといふ事が、日々聞えては、腹立しさ口惜しさ譬へがたく。近所の兒守娘などに五厘錢など與へて「今ね、アノ我家の御母さんが御向家へ行つて内儀と何か話してるがね、何を話してるかソツと聞て來ておくれ、ソツとだよ、誰れにも言つてはいけないよ」などゝ頼めば、守兒娘は正直に聞いた通りを復命する。それを聞いて女の狹隘き胸は張裂る如く發へて、ウイムヨ〳〵と癇が起り、持つたる煙管を折りかねまじき時などに、其兒が傍でマゴ〳〵悪戯でもして居らば「エ、此兒のお陰で、彼んなに言はれるのだ、腹の立つ餓鬼め」とツイ打つてやりたくも、捻つてやりたくもなるが無理か。然るにかゝる時、若し我慢が出來ずば、嫁は察しのない世間から、鬼か蛇の様に言ひ囃されて愈々腹が立ち、愈々其兒が悪くなり、御此上の悶着が起り、遂には何うなる事か果は知られず。縱令前述の何の場合にも、嫁は辛抱の上に辛抱して、堪へて居るとしても、姑の外に、小姑又は良人の兄弟の妻などと、假令繼子なくとも、嫁の一擧一動に注意して居て、蔭で非難をするものありて、何と堪忍しても、堪忍の出來ぬ様に仕向くるを奈何せん。尤も其人達とても、別に大した悪氣でするにはあらねど、嫁の身にとりては隨分辛い事ならずや。今こゝに其事情の大略を述べんと欲せしかども、クダ〳〵しければ略しぬ。讀者注意して後文を讀まば、思半に過ぎん。

ア、嫁殊に繼子を持てる嫁ほど辛きもの亦世間に在りや。

然らば姑亡くなりて後は奈何といふに、以前は小姑にて、今は他家へ縁付いて居る女などが、又代りて敵役をつとむるなり。これ等の女は他家へ縁付いて後も、兎角に里方の事を氣にかけ、殊に母親亡くなりて後は、他家から這入つて來た兄嫁が里方の實權を握り、追々自分等の勢力衰ふるを見て、兄嫁が専横なる様に思ひとり、この身に相談もせずに彼んな事もした、こんな事もした、あれでは家の爲めにならぬ、母様が存世て居たら、彼んな事もあるまいに、などゝ様々に不服

を唱へたがる癖に、女の常とて其面前では得言はず、蔭へ廻はつて種々の毒舌を弄するものなり。されば繼子の事についても、矢張り彼是と苦情を言ひたがり、目に角立てゝ兄嫁の仕打を見て居るなるべし。而して兄嫁は前述の事情よりして、繼子に對する感情面白からずなり居れば、いかに注意して居ても、知らず〳〵の間に、種々の失策あるべし。是に於て其女得たりかしこしと、親族中へ其事を流布れ廻はるなるべし。蓋し其女とて矢張り人間なれば、妄りに兄嫁を苦しめんとの悪氣よりする事にはあらず、眞實里方の爲を思ひ、我姪可愛しと思ふより起る事なれば、強ち咎むべきにはあらねども、さりとては餘りに無思慮ならずや。而して此無思慮が當世一般婦人の常態なりとは噫。閑話はさておき、かうなると是迄は然程にも思はざりし姪が、何故か急に無闇と可愛くなり、我家に來度毎に無性に優しく待遇し、色々と繼母の仕打を問ひなどするなり。而して其兒も亦前述の事情よりして、幼稚き身にも繼母を面白からず思ひ居る所なれば、其問に應じて平生の不平を述ぶるなるべし。さうすると叔母は平生不快に思へる兄嫁の悪事の段々なれば其の二倍にも三倍にも聴きとり、益々不憫に思ひて「本統に残酷い繼母だねえ、エヽ、そうかえ、そんな事を言つたかえ、こんどそんな事を言つたら、斯ういつておやり」などゝ悪智慧をつけ、又は居合はす人に向ひて、「何時ぞやも斯うでした彼様でした、餘りではありませんか」と咽喉はつて話せば、其人も交際上合槌を打つを聞いて、其兒は益々繼母を悪者と思ひ込み、其悪者を悪んで、我身を庇保つてくれるのみか、可愛相だとて、行く度毎に色色のものを呉れて、優しくして呉れる叔母懐かしく、後には先方から問はずとも、此方から色々の事を告げて行く様になるなり。扨又斯うなると、繼母の方にても亦た益々不快を感じて、益々其兒を慈しまねば、其兒も亦益々叔母に懐き、繼母をば我敵の如くに思ひなし、我身が實際悪かつたと内心思ふときにても、好い加減に言語を飾つて、叔母に告げ行けば、先入主となり居る叔母は、一も二もなく直ちにそれを信ずるのみか、前にも述べし如く其兒の言ふより二倍にも三倍にも仰山に聴きなし、それに作意を加へて他人に話れば、其話しが何屋の老婆、何屋の妻君と、段々傳はり行く間に、少しづゝの作意が加はり（作意とは言へども、別に仰々しく吹き

たてるつもりにはあらず、只談話を面白くせんが爲に、知らず〳〵多少の作意が加はるものと知るべし）加はりして、遂には三倍にも五倍にも大仰になりて繼母の耳へまで傳はる、そうすると繼母は「オノレ有りもせぬ事を方々へ流布まはるゝナ憎鬼め、是といふのも叔母めが悪智慧をつけるからだ」と彌叔母を怨み其兒を怨み、遂には人並の感情を失ひ、故意に種々の虐待をなすに至りながらも、逢ふ人毎に自己の寃枉を訴へ、果は彼の叔母をそしりて他人との間を割き、又は平生彼の叔母と仲悪しき人々をかたらひて味方をつくり、以て彼の叔母に對抗するに至るは、少し利發なる女には免れざる所なり。かくて親族中が敵味方に分れ、降參するものあり、反抗するものあり、何方附かずの傍觀派あり、斥候あり、間者あり、世間からは毀譽褒貶とり〳〵、出入の商人職人殊に髮結女の如きは、兎角出入は御世辭が大事だと、彼方へ行つても此方へ行つても、都合の善き様に、御氣に入る様に言ひなして、益々其仲を裂き、遂には些少の事が近因となりて破裂し、親族會議まで開いて、イヤ繼母を里方へ引とるの、繼子を叔母の所へ預けるのといふ騒動にもなりかねぬなり。

さてかゝる場合には、親族中に威望ある人とか、繼母の良人とかゞ大勇斷を以てこれを處置するにあらずば、事は治まらぬものなれど、かゝる勇斷家は世間に稀なるものにて、多くは姑息の所置にて、一時を彌縫するにとゞまるものなり。さればー波をさまりて又一波來り、到底際限なき其間には、繼母繼子双方ともに普通の感情を失ひ了り、果は人間の仕業とは思はれぬ程の事をもなすに至り、天晴の惡婦、天晴の不孝者となり了るなり。而して世人は徒に其末流を見て、深く其源をさぐらず、人でなしよ悪人よと罵るなり、亦あはれならずや。

若し幸にして右の如き敵役あらざりせば奈何。それにても双方の不幸は避免る能はざるなり。此場合には其良人を除くの外、別にこれといふ保護る可き人なきを以て、以前姑ありし時の辛苦の反動一時に繼子の頭上に落つるなり。若し又繼母普通の婦女子よりは、善良の性質にて、迚も以前の辛苦を心に介まず、眞實繼子を愛し居るとするも、例の口善悪なき女どもは默つて感心しては居らず、イヤこの寒いのに彼の兒は足袋もはかないで居る、實母が存世たら彼な事はあるまいの、イ

ヤこの暑い日中に傘もさゝせないで使に出したのと、實際惡氣でしたのではなく、ツイ事に紛れて氣がつかずに居る事を故意としたかの樣に言ひ囃す。それ等を聞いては女氣の胸安からず、寒い時には必足袋をはいて出よ、暑い時には必傘をさいて出よと、懇に教へ置きても、小兒の事とてツイ忘れて外出することもあるを見ては「又足袋をはかない、妾があれ程に言ふに聽かないんだ、御前が寒いばかりか、妾までが人に惡く言はれるに」と叱りながら、平生かゝる事にて人々に好く言はれぬ事を思ひ出して、今更の如く腹立しく、其憤懣が女の狹隘い胸一杯になり、何もかも忘れてツイ散々に叱る事もあるべし。叱ると小兒は泣く。其泣聲が近所へ聞こえる。「又繼子いびりが始まつた」などゝ言はれる。縱令言はれずとも氣が廻はる。「エヽ何うしたら宜いんだらう、人に後指をさゝれぬ樣にと氣をつけりやあ言ふ事を聽かず、それを聽かさうと思つて叱りやあ泣く、泣きやあ又殘酷い事をした樣に思はれる、本統に何うしやう」と述懷しても、他人は眞實尤もと聽いてはくれぬ樣子。「アヽ是からは何うかして可成泣かさない樣に」と注意に注意をしても、小兒の事とてさもなき事に度々泣き、賺しても聽入れぬ時には、眞實の母でさへ癇癪の起るものなれば、かゝる場合の繼母は倘の事「エヽ何だつてそんなに泣くんだねえ」と發へず腹立聲を上げる。小兒は倘泣く。「エヽクソ」と思はず打つ。益々泣く。「ホントに何うしたら宜いんだらう」とツイ／＼捻る。「イタイー」と叫ぶ。既に斯うなつては、繼母は憤怒に逆上して、前後も辨まへぬ程になるものなれば、知らず／＼思はぬ殘酷の折檻をなす事もある。それに枝葉がついて近所中の評判となる。「アヽ辛い事だ何うしやう」と熟考しても、人間の智力にて及ぶ可き事にあらず。さればとて愛の神は遠くの昔に飛び去りたまひて、招けども還り來まさゞるを奈何せん。かくて月日の經過うちには、繼母も人の蔭口になれて何とも思はぬ樣になり。腹が立てば立つに隨ひて、打つ捻る怒鳴るして憚からず。後には故意と雪のふる日に襦袢を着せずに遠方へ使に出す位の事は仕兼ぬ毒婦に化し了れば、繼子も亦苛虐になれて、强情き小憎き小間獪れた厭な兒となり了り、他人までも愛想をつかす程になる事は後々に述ぶる所を見て推知すべし。未だ愛嬌深き時でさへ前述のごとし、况して其の樣な厭

な見となりて彼の事は言ふに足らざるなり。

讀者讀んでこゝに到らば、前述の多くの場合に於て、繼母の良人、即ち繼子の父なる人は何をなし居るかと、思ふ者あらん。乞ふこゝに是れを説かん。凡て男は戸外の務めはげしくして、さる家内の細々しき事に注意するものにあらず。縱令注意するとも、女の如く悉しくは推せず。加ふるに家に居る事稀なるのみならず、家に居る時には、人々其言動を愼しむものなれば、始めの程は氣つかぬものなり。尤も男とて世に繼子いぢり、嫁いぢりのある事を知らざるにはあらねど、まさか現在我子我妻をさる惡者とは思ひもよらず、又實際話に聞ける程の惡者にもあらねば、氣つかぬも尤もの事なり。然れども彼の忌まはしき現象段々外面に表出して來ては、男とて氣つかずには居らず。氣づいては默つては居らず。晩酌の折などに、妻に向つて多少の小言を言ふ事もあるべし。そうすると妻は我身の寃枉を悲しみ居る折とて「良人までが此身を惡しき樣に思へるか」と口惜しく、全力を盡して分疏をする。其分疏を良人が「成程そうしたわけか」と納得せば事はなけれど、若し「それが心得違ひだ」とか何とか言い出す事あらば、彼一句此一句の間に、妻は激したる折とて、自然言語にツンが出る。そうすると良人も亦「何を生意氣な」と、こゝに夫婦の間に波瀾が起る。而して其飛沫は結局繼子にかゝりて、彌邪魔物にせらるゝなり。若し又良人は人並すぐれたる賢者にて、深く其間の事情を酌量け、かゝる場合はかくせよと、懇に諭す所ありて妻もそれに心服し「是からはその樣に致しませう」と心掛くる事ありとも、感情は智識によりて急に變化するものにあらねば、心の底より其兒を愛する樣には容易になり難く、彼是して居る内には、前述の如き種々樣々の事情が續々と起つて、折角の心掛を打消し了るを奈何せん。されば良人の力にて、此繼しき中を程よく調和せんとするには、其德百人にすぐれ、一族一郷を薫化するに足るものならずんば不可なり。是れ果して當世人士に望み得べき事なるか。

道しらぬ物ならなくに足引の
やまふみまどふ人もありけり

爛煥

凱旋將士

麻耶山樵

（詩經東山講義）

引

世に公道あり人情あり、相違ふが如くにして相悖らず。國家一旦緩急ありて義勇公に奉ずるの際に於ては固より身を忘れ家を忘る、斯忠君愛國の精神發して所謂公道なるもの立つ。平居無事君恩に濡澤するの日には父子相親み夫妻相愛す。親しきを愛するの心情と公に奉ずるの精神とは一元より生ず。唯私を以て公を廢せず、公を以て私に殉ぜざるを貴しと爲す。甲午乙未の盛役我二十万の雄將猛卒家を忘れ身を忘れて國威を世界万國に顯揚し、今や概ね晝錦凱旋す。其海を越えて深く朔北の野に入るに當りてや風饕雪虐の下一意奉公に餘んの念なく、攻城野戰の際一身を忘れて我　皇の爲めに盡す。是れ此忠勇我大帝國臣民先天の美質に屬す。則ち謂ゆる我邦人の公道なるもの豈に美にして且つ偉ならずや。然り而して敵兵甚だ弱く、城堡荐りに陥り、閑居無事に苦むの時、條約既に成りて撤寨歸裝に暇なきの際一片の爽情遠く家鄕の父母妻孥に及ばざるものなからんや。但既に身を以て君と國とに許るしぬ、區々の情よしや心に發するあるも之を口にすべからず、是れ往昔周公旦が東山の詩ある所以なり。伏して惟みるに我　皇聖明發時屢ば詔敕を發して海陸の將士を慰勸し、而して即今廟堂のうち論功行賞に急にして其遺典なからんと期し給ひつゝあり。蓋し叡慮亦東山の深旨なり。茲に東山の詩を義解する所以のものは亦以て朝廷士を愛し、勞を思ひ給ふ盛旨の在る所を述べんと欲する也。　乙未八月。

一篇の主意（以下俗語を用う）

此東山の詩と申すは周公旦自作のものにて、管叔蔡叔が殷紂の子武庚をそゝのかして、叛逆を企てたを、成王の命を奉じて周公自ら將として征伐せられ、凱旋の後此詩を作り歌つて部下の將士を勞はれたのでムる。初め周の武王が殷の紂を滅しました時、紂の子に武庚といふ者があつたを取り立てゝ

一個の大名となし、紂王譜代の家臣を添へて紂が都してをつた地方幾十里かを與へ、背後變を慮つて我が弟で、周公には兄にあたる管叔鮮、蔡叔度といふ二人の兄弟を監督者として武庚の處へ遣はして置きました。間もなく武王は崩じて子の成王が立ちました、併し幼少の事であるから叔父なる周公が冢宰（今でいへば總理大臣）となつて内政万端の事を主宰してをられた。兄の管蔡二人は之を面白くは思はぬ。此管叔蔡叔といふは兄には武王弟には周公といふいづれもすぐれた聖人を持ち、しかも、文王ほどの聖人の子で有りながらどういふものかひねじけ、嫉妬深い人でありました。今周公が冢宰として威權盛んなるを見聞きしてどうも不平でたまらない。そこで反間を放つて、今に周公は成王を弑して自立するのであろうと言ひふらしたのが成王の耳にもはいれば周公の耳にもはいつた。周公は固より此流言の出どこは知らぬが兎に角かやうの評判があつては我が折角の志も何もならず、死してのちも父の文王や兄の武王に會はす顔がないと乃ち成王はじめ他の大臣たちへ斷りまして二年ばかり東の方へ嫌疑を避けてゐました。其頃大雷暴風雨があつたので成王は斷國をせんとて宗廟へ入つて、會ま金縢の書のうちから父武王が嘗て病氣の時周公が身がはりに立ちたいと天に祈つた願文を見付け、大に感激後悔いたして、我が身を棄てゝも周室の安泰を計り玉ひし叔父御に何の二心のあるべき、さきの惡評判は全く讒人共のこしらへごとなるべしと早速に周公にわびて、再び宮中へ呼び迎へ、以前に倍して信任される間もなく彼の流言は管叔蔡叔のした仕業と知れてきました。管蔡の二人の初めは謀計圖に當りて喜んでゐたが、周公再び信任されるやうになつたと聞て大に驚き、こんどは我々が上じやと尻がかゆくなつて來て遂に武庚をだまし、自らは參謀となつて公然反旗を擧げました。そこで大義親を滅すといふ誡に聖人の不幸で周公が征討に參ゐられるやうになつたのでムる。前申す通り此詩は凱旋後將士を勞ふ爲めに作られたのであるが、詩の文句が皆將士の口上になつてゐますと申すは周公が將士たちに深き同情をあらはされたので、あの遠い處にこの長の年月艱難辛苦を見せたも王事もろきなき致方のない次第、此方にては斯程までにお前方の心情は酌み知つてをる、決して恨んでは異れるな、よくこそ辛棒して忠勤をぬきんじてくれたぞ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

との意を含ませたものでムる。されば此詩四章とも徹頭徹尾將士の抒情詩で、毎章四句同じくあるは征旅の困難を切にいひあらはしたもの、將士たるものかやうの詩をきかせられては益す此人の爲なら死んでも惜しくないといふ情が起つてきませう。なに詩經には此詩の次に周公の此詩の意に答ふる爲めに將士等の作つた詩があります。一篇の主意は右述べた如くでありまする。

第一章

我徂東山　滔々不歸　我來自東　零雨其濛　我東曰歸
我心西悲　制彼裳衣　勿士行枚　蜎々者蠋　烝在桑野
敦彼獨宿　亦在車下

◎章意◎　外征の將士亂既に平ぎ、凱旋の歸途に在りつゝ、出陣歸途種々の困難はあれど、先づ／＼師も完く、生命も全くて、歸るやうになつたは喜ばしいことじやといふことを述ぶ

◎解義◎　さて我れ王命を畏み奉り、逆賊が據て叛旗を擧げた東山へ征討に往いてからイヤモウ久しいこと故鄕へは歸らなんだ。或時は雪を冒して進んだこともあり、或時は星を戴て寢たこともあつて今考へれば仲々の苦勞であつた。今度漸く亂が平いだによつて東より歸り來れば生憎と雨がシト／＼と降りをる。雨天の下泥土のなかの行軍またキツイ難義じや。まだ東にをる時戰爭中は故鄕のこと心に懸らぬではなかつたが何かに取紛れてをつたが、いよ／＼歸るのじやといふ時になつて不思議の事には嬉れしいといふ感じよりも悲しいといふ情が一杯じやつた、物三年音信をしやうにも聞うにも道はない、故鄕の家屋敷今はいかゞなつてをるとしややら、いとし可愛の妻や子何して身すぎ世すぎをしてゐやるとぞと身は東に在つて心は西に向つて悲んだじや。併し征伐もすんだと、最早此着苦しい軍服も着ないで濟む、いざや着心のよい平服の衣裳をこしらへ、歸仕度をしやう、よもや復た卒伍に連り枚を啣むやうのともあるまいと思つたのじやが先づは無事で凱旋の途にのぼつた今日此頃見る物につけて我が身の上も思ひやられて感の深いといふは歸のほとりの桑ばたけに蠋がムク／＼と好きな處に動いて不自由といふとも無さゝうに葉を食ひをる、我身は家靡く室靡く敦然として只獨りかうして此車の下に（むかし支那では車は戰ふ時には將卒の楯となり、止る時には天幕の代

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

用ともなり、兵器衣服みなこのうちに載せ置く者之）寐て雨露を凌ぐ、不自由は固よりなれど、戦争の時にはいかな堅城鐵壁にても枕を高うしては寐られぬ、凱旋とおもへばこそ此車の下も錦の床と感ぜらるれ。是はわれらの幸じや、決して虫など疎むとではない。

第二章

我徂東山。 滔々不歸 我來自東 零雨其濛 果臝之實
亦施于宇 伊威在室。 蠨蛸在戶 町畽鹿場 熠燿宵行。
不可畏也 伊可懷也

章意　これは征人歸途に在りてまだ家に歸りつかず、住宅のことをあれこれと想像して、切なる思念の情を叙したものじや。

解義　われ東征して此方長い間家に歸らぬ、辛苦漸く免れて歸途に就けば又此雨じや。獨り車下に臥して寂しさ物不自由さ限りなけれど併し多年住みなれた室家も程近い、程近と思へば此長き歳月留守にした家屋敷いかゝなつてをることじやろう。定めて柱は傾くまゝに傾き、庭は荒るゝまゝに荒れはて、昔て家に在つた時實播にした果臝今は延びて屋根に傳り、實がそこここに結つていぶせくあるじやろう。部屋は久しく洒掃もせず、風もはいらず濕氣がちなれば彼の伊威がそこら這ひゐて、おもへば氣味の悪いことじや。部屋の戸は開けたなり人の出入もない、蠨蛸が處得顏に網を張つて、仲々はいられることじやあるまい。かねて遊息の場所にと家の傍に少しの隙地を設けて置いたが守人なければ今は定めし鹿や猿の遊び場になつてをるじやろう。又彼の宵行といふやつ、人もをらぬあばら屋にチヲホヲ飛ぶのを見ればあまり心地よくもないが、必ず我が庭先あたりにひかりをるに相違ない。是は又何たる事ぞ、紛々たる異物わが大事の邸宅に跋扈するとは、いやなことじや。いやなことじやが如何に立派な家屋敷とて人の所有では居るとも出來ぬ、わが有とあればいかに荒れてをろうが、陋しからうが矢張懷しい。サア／＼早くゆきませう。

第三章

我徂東山 滔々不歸 我來自東 零雨其濛 鸛鳴于垤
婦歎于室 洒掃穹窒 我征聿至 有敦瓜苦 烝在栗薪
自我不見 于今三年

章意　これは空閨を守る妻が夫の身を案じつゝ其歸宅を待ち、夫かへり來て夫婦再會感慰の情を寫したものでムる。

解義　さて此長の歲月東山に在て備に艱苦を嘗め、歸途また雨に出値ふてさん〴〵困却いたす。夫たる此方が外に在て難義しをることを家にのこした妻も定めし案じ暮らしてをることじやろう。天地の氣といふものは却て鳥や虫がよく前知するものじやが、これから雨が降らうとする前には蟻は地の濕りを避けて垤の上へ上つてくる。鸛はこれを知つて垤の上におりて、出て來た蟻を食ひ、且つ戛々と鳴く、アレ鸛が鳴く、今に又雨が降つてくることじやろう。ア、我脊子が道中の難義想ひやらるゝと我が女房の眞實心、わが身のことを思ひ煩つて人にも話せず、獨りさむしい部屋に嘆いてゐやるに相違は無いぞ。併し亂も平いだ、凱旋に程もない事はモウ知つてをるはづ、われが歸つてもいやな思ひはさせまいと家屋敷を拭き掃除し、からすうりの蔓は美麗に刈り取り、伊威も蟰蛸も皆追ひ拂ひ、此年頃手入もせず荒るゝまゝに壁も落ち、柱もゆがんだ其隙間を窒いで寒い風を我身にあてさすまいとしてをるじやろう。さて色々と途中者へ來たがいよ〳〵安着いたした、ヤレ〳〵安心した。そこの蔓物は何かい、苦瓜か、栗の木に延ひをる、これも久しいものじや、われが此處を出てから三年といふもの見なかつたのじやからなア。

三年の久振で故鄕に歸り、家人妻子の如何に歡笑して相迎へたかいはひでも知れる。此時に當りては目に觸れるもの一として感慨の種にならぬものはない。そこで斯樣な瓜とか栗とか何處にでもあるつまらぬものを借りて喜ぶが如く歎くが如く寫したは天晴の才華、人情を曲盡した處妙といはねばならぬ。

第四章

我徂東山　慆々不歸　我來自東　零雨其濛　倉庚于飛
熠燿其羽　之子于歸　皇駁其馬　親結其縭　九十其儀
其新孔嘉　其舊如之何

章意　この章は好時節に凱旋し來て、男女の樂を遂げ、ホームの快樂を享ぐることを述べたものである。

解義　さてヤットの事にて凱旋し來り、故園の風物を見、旣に妻子のある者は契濶の情を強べ、唱隨の樂を遂ぐるこ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とを得た。また妻といふもの持たぬ身の若きやからは此際ニユウホームをこしらへて積年の寂寞との外征中の憂き艱難を忘れたいと思はぬ者はない。されば我れ王師に從ひ東山に往きしより此かた三年といふ長い月日故郷に歸るとも出來ず、攻城野戰さま〴〵の困難を凌ぎ、漸く歸途に就けば雨が降る。零雨の事なれば復た晴れた快い天を仰ぐとも出來れど、降りみ降らずみ永の途中永の濛雨にとんとあぐみはてた。併し解隊歸郷して見れば頃しも春の最中のよで倉庚は奇麗な羽を以てこゝの梢かしこの枝と飛びあるひてをる。鴬の鳴く頃は桃の花の盛りの時恰も婚姻に定められた時節じや。幸に行媒の兩家の間に周旋するがあつて、こゝに六禮の儀をつくし、之子（花嫁のこと）いよ〳〵我に歸ぐことになつた、については駟馬に打乘り、我に親迎せられて來る其馬はいづれも毛色の立派なのをえらみ、その門を出づるときには母親が娘の帨を結びそへつゝ妻となり婦となつての心得を申ね誡め、また里方身分の程々に從つて出來得る限り嫁入道具を立派にする。かくて合巹同牢の禮は遂げ、内外怨曠の嫌ひもなく、まことに目出度い、これで積日の艱難辛苦は煙の如くに消え去つて、蜜月の喜樂諧和は海の如くに湧いて來て、新婚者は固より甚だよろしいじや。新婚者の上はかうであるか又舊より妻のあつたものは如何かといふにこれは又別段の事じや。獨り空閨を守り、鸛の鳴くを聽きて嗟嘆を爲し、洒掃穹窒して夫の歸りを待ちをつた貞實の妻、外征日久しく、身の不自由につけて愈よ室家の有り難きを知り、裳衣を制し歸裝を整へた其日より「愛」のおもざし忘れるひまのなかつた忠節の夫、かういふ夫婦の再會じやものをそのよろこびたのしみのいかゞであるか想像もつかぬとじや。

◎多年米國に留學せられし塚本ふぢ、市屋いさ（神戸英和女學校卒業生）の兩女は女子大學を卒業して、亦同じく坂本夏子（明治女學校卒業生）は[illegible]病院に看護學を卒業して何れも去二日無恙歸朝せられたり。

破れ衣

流水庵

あやしきばかりうち古るび
糸もさめえぬ破れ衣
わが身つゝめるつゞれゆゑ
かたみにむかしの忍ばれて
糸もたえ〳〵そのまゝに
歌ひぞ出づるその衣の
縫ふにたへぬぞあはれなれ
縫ふにたへぬぞあはれなれ

今むかし

わが夢は　ふるさとの
空すみて　やま遠く
水きよき　田の面に
くだりたつ　田鶴にあり

わが夢は　ふるさとの
たらちめの　膝の上
ちゝ母を　くはへてし
罪しらぬ　昔にあり

わが夢は　ふるさとの
をさなどち　小鳥鳴く
欅の森　昔ふみて
さぐりてし　鳥巣にあり

わが夢は　ふるさとの
露きよく　咲き出でし
わがほこり　のぞみなる
ひともとの　薔薇花にあり

されど、あ　わが夢は
はかなしや　さめてはてぬ
わが夢は　さる年を
あざけりて　きえうせぬ

夢さめて　故まくら
いまむかし　偲ぶれば
ありし世の　しみ〴〵と
頰をつたふ　わがなみだ

わがなみだ　あゝ、いまは
ふるさとの　壁落ちて
寂寥で　荒れはてし
わが家の　跡にあり

わがなみだ　あゝ、いまは
ふるさとの　古き家に
老いまして　くづをれて
待ちたまふ　母にあり

わがなみだ　あゝ、いまは
ふるさとの　花ちりて
苔さびし　阿字うすき
一基の　墓にあり

わがなみだ　あゝ、いまは
旅の夢　おそはれて
世のあはれ　身のあはれ
ひとり泣く　「今」にあり

あ、わが夢　わがなみだ
むかしいま　いかばかり
うつろへりな　さる年に
あ、われ老いぬ　われ老いぬ

歌へがし

露の月わび草むらに
　いさもあはれに啼く虫よ
かばかり歌はうたふとも
　しられでやむはなれのみか
よしや聽く人あらぬとも
　すみたる空の月むかひ
たゞ一すぢに歌へがし
　かくてぞ歌はたふとけれ

二つの星

母の膝にをさな子は
　もたれながらもつく〴〵と
　額の星をかぞへつゝ
　これは何ぞとたづねけり

（二九二）

露ほほゝ笑みかいだきて
雲なす層のにこやかに
ほこりの川ふさこたへけり

何の川ふさなさな子は
まろき目なしてあどけなく
雲の頭なうちまもり
可愛さあまりてたゞれけり

こたびは雲せごそかに
くろゝし瞳ぶゝへゝ
汗の川ふさこたへけり

つみに汚まざるみさな子を
世の波だへし雲かり
抱けるまゝの晩つくしさ
抱けるさまのあどけなさ

あはれせにもし風あれて
二つの星のてらさずて
世はいかばかり暗あらん
みさなの星さみさな子さ

それのみか

星からの月ふみこぼす雲千鳥
しらでや汝れはつれなきか
めで植へし薔薇くひからす花の虫
しらでや汝れはつれなきか

つれなしされどせむるなわが友よ
つれなきものはそれのみか

琴の音

松が枝に　月の色清く
ながれゆく　河波しろし
枕して　たつは誰が家ぞ
聞すみて　琴の音のする

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の夕　こゝろの乱れひ
洗ほんさ　ひさり我れ寒の
此の月に　むかしを忍び
此の水に　あはれ忘れんさ

なかなかに　思ひはつきず
ゆく水の　ひさり流るゝ
此の暁み　我れないだむる
月さふく　水おもしろくさも

掻る糸の　調もゆるみ
うたふ歌　いさ力なし
流れゆく　波のまにまに
いつしかに　此風に寝しかな

此風に寝て　かの雲聞けば
風白く　月ほがらかに
いまゝでは　何に思ひけん
絶たえて　天の響する

こぎゆかん　かの岸の邊に
ちかよりて　生命のうたき
その人の　清きしらべに
その人の　面影ふばん

つゞけふさ　そのしらべなば
祈りつゝ　こぎもてよれば
あなかなし　松風さえて
いつしかに　琴の音の絶ゆ

かくまでに　君の楽ひ
人知れず　忍ぶるこゝろ
君知らば　あはれさ思へ
いまにまた　一曲そへよ

聞すてゝ　待てばほどへて
やがてまた　夜の風すみて
風わぶる　軍拂ふ風か
琴の音の　いみじく鳴りぬ

ひくき音は　藻靈ふ水か
たかき音は　浜遣ふ風か
ゆるゆるさ　のどけきは醒け
しみじみさ　しづけきは澄む

聞きされて　わが身を忘れ
あはれ忘れ　また世を忘る
一曲に　こゝろは動き
一曲に　こゝろは生きぬ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世にもかく　たへなる調べ
弾く人は　そもや誰が媒ぞ
悲しさのみ　世を忍ぶわれ
いたばろは　あはれ誰が媒ぞ

いまは世に　散りてゆきにし
かの人の　知らで弾けるを
かゝる夜に　かくして聞かば
いかばかり　うれしからんに

あなかなし　琴の音やめば
うち沈み　空しく思ひ
うた聞けば　またよみがへる
琴の音ぞ　われの神なる

その神に　その楽人に
わがこゝろ　さゝげて事へ
ひとつ船　此の月の夜に
この水に　泛ばゞいかに

今はたゞ　夢みるごとく
たへつゞく　琴の音に入り
月に飛び　水に流れて
そよ〳〵と　われを忘れぬ

我れもなく　望みも忘れ
絃に凝り　絃にもたれつ
夜更けて　月の落つるを
聞きとれて　知らでありける

* * * * * * *

いつまで斯く　いつまで斯く
いまはいざ　歸りゆかなん
彼の人は　われに歸らじ
此の樂は　きゝも盡くまじ
こゝろなく　水の流るゝ

はげみ

夕暮に
きら〳〵と星一つ
ひろき野に
かゞやく見れば世の人に
すてられし
わが身の上もはげまれつ
さびしくて
さらにうれしき世なりけり

ほたる

やみ夜てらして飛ぶ蟲に
　うき身が上をあかさんと
[illegible]とりのべわがかたへ
　きたれ〳〵と招けども
蟲はふら〳〵飛びてゆく
　思ひにやつるゝこの日ごろ
つれなき人のさまに似て

しやぼん球

たわひもなくてわが[illegible]
　しやぼんの球を吹きいだし
[illegible]にたまをあをぎつゝ
　餘念もなげに遊びけり

ふくれ〳〵てしやぼん球
　夢みるごとくはなれつゝ
[illegible]の風にあをがれて
　むすめの[illegible]をなめりけり

あら美つくしやしやぼん球
　みどりの色とあかき色
神のすみます宮殿に似て
　いとまどやかにかゞやけり

父さま見ませしやぼん球
　となりの庭とうちの家
からすの[illegible]もそのまゝに
　あゝらわが身もうつりたり

たちまち消えてしやぼん球
　みどりの色とあかき色
むすめの影もきえうせぬ
　むすめはほゝと笑めるのみ

ふくれて情ゆるしやぼん球
吹くそのかづはつきれども
わが世ひさつのしやぼん球
破れたしぞかなし若いが身に

戀

まが球ひらふたのしみも
こひしき文のうれしさに
われはかへとな實にやげに
戀は球よりたふとけれ

こゝろ切たきの花園
花よりさきにその人を
聞ふぞうれしきげにやげに
戀は花よりたふとけれ

したしき友のいのちゆゑ
わが戀それさとをしつゝみ
讓るぞたかしげにやげに
戀は肉よりたふとけれ

きよき心のその戀は
つゝみ得ざらん天地も
ほむるもつきたげにやげに
戀は御かとひとつなに

春よいづこへ

ひとり岸頭にたちて晩れ行く春の景色を望めは悵然なつくに抑へがたし色香匂ひし頃までは人もめでつれ空しく散さなりぬるけふこの頃は誰ありておさなふものもなし嗚呼花若し靈あらばながく人の情のつれなきをかこたん

幽花庵主

さくらもちりぬ　ふぢもまた
つれなきかぜに　さそはれて
むなしくちりさ　なりにけり

「ちりゆくは
夢のうき世を厭ひてか
罪の紗なるおもかげを
嘆ひし我をふりすてゝ
いづこの里に到るかや

彌生の春にあこがれて
狂ひにくるふ我なるを
しりしあはれと思めし
ながく我身を離れなよ

いかに果なき我とても
紅にほふきさらきの
もちの月夜の花かげに
我はうせんと思ひしを
なれはつれなく我をすて
いづこの里にゆかんさや

なれの妾の世になくば
ひさの誠もなからまし
情のつゆもかわくなり
やよ歸りなせぞ女神君

そのさき女がみ　ほゝゑみて
幽險のみこゑ　いさたへに

「おぞましや
あな愚ましや愚ましや
凡夫無明のからだもて
いかでわがみさ倶ならん

さはれ迷へる人の子よ
まほどに慕ふものならば
早くもぬけの身となりて
見るべき相のさかひなば
いでゝ靈なる花かげに
ながたましひをあそばせよ

さらばわがみは手をさりて
さこしへに花も笑むなる
さこしへに鳥もかなづる
聖き境に通らなん
聖き境に遊ばなん

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

枕頭清風

かもめ生

暦書は既に三伏の暑候の過ぎぬるを誌すといへども、殘暑鬱燠、一片の涼雨之を洗ふとなく、函嶺湖畔綠陰の士、大磯濱邊清風の客、滔々として歸ると忘る。茲時紅埃万丈たる六都の陋巷に偃居するの窮措大、財囊常に冷かにして、五尺の身幹火旗の炎威に煩悶す。清泉鬱陰の夏栖を追ふの樂事を知ると雖も、之に隨ふと能はず、却て又高士清談の坐に微風を待つの快事を知ると雖も、憾むらくは未だ其人を得ず。たゞ午睡枕頭偶や横たはる處の、三四歌集をとりて之を繙誦すれば、高調清韻の我心懷を滌つて、自ら清爽たるものあり、居ながらにして、微風時々松頭に吟ずるを覺え、溪水潺々幽谿に湧くを感じ、而も瞑想默念の裡には、風懷の古人高士が影の髣髴として來るが如きあり。彼と默契神會するの際には、妙趣言ふべからざるの快事樂事を傳ふるの清籟颯然として、枕頭に唫哦するあるにおて、我は此幽興を樂めり、我は此清味を喫せり。

窓下枕頭の清韻、之を味ふに從つて之に點すると十を二三にせり。試に之を錄して、我が清味幽興を分たん。高唫妙韻豈に何ぞ之に限らんや、たゞ之れ我が偶ま繙く處に就きて、我好む所に從ふのみ。

避暑
うつせみの此世計のあつきだにのがれかれてもなげく頃哉　景樹

山居夏興
みやこ人涼みがてらにきても見よせき入ておさす山の下水　樹足

泉聲到池塘
石ばしる山の瀧つ瀨ひゞききて末はおさなき夏の池水　頓阿

泉
大原やせが井の水を手にかけていくむすびせば秋になる覽　頼政
岩まくら清水にあきをよせくなりむすぶ袂の下のさゞなみ　徹書記
むすぶ手に涼しき影をそふるかな清水にやどる夏のよの月　西行
清水せく岩間を夏のたえ間にて梢はせみのこゑつゞくなり　家隆
心してくむべきものを山水のふたゝびすますなりにける哉　景樹

夏夕
はつせ川岩こす波に打そへて涼しくなりぬ入相のかね　保季
かはづなく田中のゐどに日は暮ておもだかなびく風渡る也　寂蓮
たちさわぐ雲のはたてにいな妻のひかるもよその夕立の空　弘訓
この里にふらぬも涼しうき雲の山のはつたふ夕立の空　頓阿
夕立の雲間の日かげはれそめて山のこなたを渡る白鷺　定家
夕立のかつ〴〵はるゝ雲間より雨をわけてもさす日かげ哉　為世

夏月
夏ふかき峯の松か枝風こえて月かげすゞしありあけの山　慈鎭
夏のよの月まつ程の手すさびに岩もる清水いくむすびしつ　基俊
庭のもはまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな　頼政
夕立のはるれば月ぞやどりける玉ゆりすうる蓮のうき葉に　西行
照し日のおなじ雲井をゆきめぐる影さも見えぬ夏のよの月　知紀

納涼
たなやめの乘船さぞな隅田川つゝみつたひも涼しきものを　廣足
月もよし川の瀨ひかりさぶ鮎を見て歸りこん涼みがてらに　弘訓
河風にうは毛ふかせてゐる鷺のすゞしく見ゆる柳原かな　仲正
道のべのしみづ流るゝ柳かげしばしとてこそ立どまりけれ　西行
行末はまだとほけれど夏山の木の下かげは立ちうかりけり　躬恒

螢

しづかなる心だにこそ寂しきに我すむ里は山風ぞふく　頓阿

檜のはのそよぐ一木のしたかげにちぎらでつどふ村の里人　定家

鳴かゝるせみの羽袖のあさしめりほすかわらすか檜の下風　[illegible]

渓澗風生竹

ひぐらしのなく夕暮の山風に色をもまたでちる木の葉かな　土御門院

しばし又ならす扇の風やめてまがきの竹のそよぐをぞきく　頓阿

夏曉

夏の夜も明すゞし竹の間にわざすへしたるきわかつぐまで　弘[illegible]

撰するもの三十首、讀者之を吟し、之を誦するに於て、枕頭自ら清風の生ずるを覺え、又以て洗暑乘涼の一策たるを得ん乎。

〇社員櫻井精作氏永眠

多年内外にありて吾社の爲に合力盡瘁せられたる櫻井精作君は、方寸子、櫻樹子等の名を以て、亦久しく本誌上に讀者と相親せられたるが、永々の病勢遂に衰へず、最親しき人の盡せる力なき看護も之が爲に効なく、去七日夜、眠に就くが如き平安をもて永き眠に入りたりと聞くも、八月[illegible]遺しき[illegible]立のぼり、十二日葬、駒町教會堂に於て遺骨と葬の式あり。故人の

遺詠

（故人の夕暮の[illegible]に[illegible]）

（一）おぼろ〳〵きにえふ
かわづのなくねに
こゝちのよる
ふけてぞゆく。

（二）・づけき園にさ
にほのしたかげに
ひとりいでて
しずしあゆむ。

（三）川瀬のこえかには
すみゆくこゝろぞ
きこゆるなき
いさしのばる。

（四）こゝろにおふなき
ただかは切るらん
しずきおもひ
たれにか語らん。

（五）こするにかひなき
ゆくてののぞみを
うきよのたび
いかにはたさん。

（六）はかなきものをも
えならわれぎごこ
すてざるかみ
きゝあげてよ。

の歌、しめやかに今吟ぜられて、余輩つくる術なし。十八日朝た、遺族、小き樽を護りて駒込の墓所に還ろ、之れ故人が朝々夕々夢寐の間だにも忘ろゝを能はざりし靈柳の家なり。

隨感

〇渠を懐ふ

彼を懐ふて直ちに連想するは、其の「無邪氣」なることにてありき。つねに光明を觀て、陰暗を後にし、恩に感泣して、怨を念はず、邪推と嫉を懐むとは、其の殆んど爲すと能はざる所ろなりき。故に、著想「純潔」にして、玲瓏として透明なり、著筆文章、自然に玉を轉ずるが如し。尤とも推服すべきは、其「堅信」なり、疑惑無雜、醇乎として、天父に委ね、事々に祈りして、毫も疑はず、所謂る「子」なるものは、正に斯の如けんと思惟せられたり。而して、「敏才」太はだ驚ろくべし、學を好み、理に明るく、融解悟徹して、滯ふる所を見ず、彼が性質の一つは、自から恐にするとにてありけり。全躰を表露して、風采に、言動に、神形奕々たるものは、其の「天眞爛漫」たるとなり、余は未だ斯の如く開心放露して隱す所ろなかりし人を見ず、殆んど表裏内外の別なくして、而して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事宜を誤まらず、尤とも不可思議の德を健立したりし也。鳴呼、彼の事業は、見えず聞えざる所に多くあり。彼によつて開悟轉迷せしもの、頗ぶる多し。彼によつて、惡感情を洗滌し、洒然として大觀せしもの尠なからず。彼が自然にして愛らしく而も天威侮どりがたき醇々たる諫語によりて、翻然として改ためたるもの余が知れるのみにて數人あり。彼が洒落に馬子歌を歌ふ時は、天地に究迫の事あるを忘るべし。彼が温雅掬すべきの眞情をもて宗 教を談ずる時は、懷疑を挾むべき餘地なかるべし。彼は、「小公子」の成人したるもの也。彼は、「ロベート、ボルンズ」の幼者なり。彼の一生は、山櫻の如し、最と短かゝりしが、其にほひ忘るべからず。左れど余は言はん、其身つねに病めりしが、思想の健全なりしは、類すくなし、其齡は少なかりしが、老成靈熟、殆んど一家を爲せりと。余輩は、彼の一生を短かしとは思惟すると能はず。

○月上り花開く

人間、氣息絶して手足硬攣し、親しきもの、悉く飮泣閉獄

す。時に、望后數日の月、海霧を破つて上る。銅色曚らくして赤く、慘として凋れる血に似たり。起つて少焉之に對し、亡き方寸子の靈の影を追慕す。思念徹夜、遂に眠らず。拂曉、光明の少しく東方より白む時、出でて庭前に逍遙すれば、あさがほの既に鮮やかに滿開せるを見る。色ふかく、露こゆく、影淸く、香ゆかし。主人を知らず、一と日の命を思はぬ不便さよと、寧ろ摘み取つて、書冊中に挿はさみ、則はち限りなきの紀念とす。鳴呼、人ゆきて月上り、色うせて花開く。無情は、即はち有情の至れるものなりけり。

○某を送る

念々同棲す何をもて寡と謂ふ、逝くもの素と亡びず奈何ぞ未亡と呼ぶ。双蝶侶を失ひて隻影さびしからず、鴛鴦獨り浮んで水に情あり。昔し甲州に此人に會ひ、今越路に別れんとす、甲越の緣古より奇、此緣尤も奇。玆に永眠の人に歌ひて彼處に其姿を慕ひ、佳人長年を獻げて遺業に仕へんとす。生死本來二にあらず、况んや合離をや、之を送りて涙あるとなし。落花塵に化して花は常に春、流水塵に和して水は斷えず淸

し。夫れ交情は不變恒久の靈に於てせん哉、則ち眠れるものなし、逝くものなし、故人なし、未亡者なし。相同もに一大光明に對ひて一大和樂を唉はん也。

○元良博士の參禪

元良勇次郎氏の參禪日誌を「日本宗教」第二號に於て見る。理を攻め、道を考ふるの士は、斯こそありたけれ。苟且にも文學博士など稱ふる人は、なか〳〵に此の幼な氣は存せざるものなるを。隻手の音聲を耳にて聽せとの公案を與へられ、専念工夫數回の后ち、正坐して兩手を胸前に合せ、頭を前に傾け口を結びて全身に力を充滿して示し、坐するは非なり直立せよと喝せられて、堂々として直立するの邊、何んぞ修道のこゝろの懇篤なるや。人斯の如くして初めて道を修むるとは謂ふべけれ。

○一事即萬事

梅に春を覺り、すみれに微笑を念ひ、流の囁くに誠の鼓動を感じ、煙の飛散に人の去來を考ふるなど、心あるものの目にうつろへる一事は萬事の雛形たらざるとなし。クラッシヨウ歌つて云く、

Welcome to our wondering sight.
Eternity shut in a span!
Summer in winter! day in night!
Heaven in earth! and God in Man!
Great Little One, whose glorious birth,
Lifts earth to heaven, stoops heaven to earth.

さらば、天父を顯現するもの、其子に及くものなく、其子を顯現するもの、其門徒に及くものなけん。生きて活模範を示す、之に勝りたる傳道あらんや。

○愛の御しもと

鞭けよ吾神、碎けたる吾心は只管に御鞭を待つ。御鞭の下る所ろ御心ありとして確信せん、御鞭の懲らす所ろ望みありとして感謝せん、爾は無益に動き玉はず、望みなきに責め玉ふとなければ也。

○絶望すると能はず

客舍吾を容れず、温かき室家吾を鞭たんとす、犬も其住家に

許さずして吠え、樹陰も吾を厭ひて天より雨ふらんとす。嗚呼、總て棄られし尤も貧しき人は、尤も富める實に近づくことを得たり。誰か、人心に向ッて絶望せんとす。絶望の人は、利己の人なり。己が利己に害せられて、人間の價値を辨識すること能はず、之を一種の自殺とは言ふ。最后に至る迄で、確信す、これ勝利なり。たとひ世上一人の其人なしとも、我自己現に其人とならん、則ち是れ成功なり。

新刊書

磯山松

○文藝倶樂部　第五、第六兩編　博文館發兌

文藝倶樂部第五編覽むる所、六種の短編小說あり雜錄欄は例によりて賑やかなり。本編の優品は柳浪子の『黑蜥蜴』北田女史の『鬼千疋』齊軒子の『奔馬』の三なり。『黑蜥蜴』は「隻目で跛の蟾蜍」ほどに面貌は醜くして、心は眞珠よりも美しき大工の女房お都賀が、夫の爲め子の爲めに心を鬼にして邪慳無慈悲の男に黑蜥蜴を食はしめて、之を毒殺し、自らも水に投して死するといふ悽味ある趣構なり。字々悽惋慘憺、柳浪にして　近頃の傑作なり。『鬼千疋』は女學生上りの邪慳なる小姑が、温和なる兄嫁をイヂメたあげく、其兄嫁が入水して死するといふ仕組。『奔馬』はイクヂなき畫師が貞操なる女房の死諫によりて熱血を吐きて「奔馬」の靈畫を描き、以て代々畫家たるの名聞を昂げて、自らもまた命竭きて死すといふ悲劇。兩者共に着想陳套なれども近頃見るに足るものなり。第六編には紅葉山人によりて世に紹介されたる泉鏡花の『外科室』てふ短篇あり、着想奇拔、文字巧妙、蓋し第六編中第一の傑作ならんか。乙羽菴主人の『人鬼』及び一葉女史の『經つくゑ』もまた佳。露葉の『うつせ貝』は嘗て女學雜誌にて拜見したるやうなり。是も亦好文字。其他雜錄欄内など讀むに足るもの多し。

○不言不語　紅葉山人作　春陽堂發兌

今年正月元旦より讀賣新聞紙上に花を咲かせて、乙未の文壇を文りつゝ、春は隅田の櫻のうつろふと共に其局を結びたる、紅葉山人が『不言不語』は此頃一册の美本にまとめられ、美しき裝ひなして、例の春陽堂より發兌せられぬ。本篇の批評につきては、未だ一册にまとまりて出板にならぬ先きより、既に諸大家の評やかましければ更に予の拙評を加ふるの要を見ず。批評家の深酷なる眼光に照らされては、之に幾多の缺點あるとの摘出せらるべきも、なほ紅葉山人の作中にての優品傑作たる價値はたしかに在り。其筆力のいよ〳〵輕妙を極め、其才氣縱橫に煥發せるは實に敬服の外なし。然れども相も變らず、森嚴壯大の理想に乏しく其女性にはレデーの淑德を備へたるものなく、其男性には紳士の英質を有せるものなし。其男女の戀情を描寫するや、紳士淑女らしきもの〻戀愛も、優男と藝妓との戀愛も、其間に殆どけぢめあることなし。予紅葉に於て甚だ之を惜む。

○商業資料

大坂經濟會より發兌する「商業資料」は、文界數多き雜誌中、他に見ざる面白きものゝ也。面白き中に、實益を挿み、古談の中に、新事を敎ゆ。與謝の苦心、堅々觀るべし。

○臺灣陣　碧の家栽芳著　春陽堂發兌

「臺灣陣」といへば、征臺軍の戰爭日記のやうなれども、さにはあらず、これは和藤内といへば、小兒がのぼす凧の繪にも畫かれて、人口に膾炙する國性爺鄭成功が實錄なりといふ。著者は前がきして、葉林子が記する處大概荒唐無稽の妄誕にして、夢幻的史劇たるに過ぎざるを憾みとして、廣く事實を探りて、傳記的小說となしたりといへり。然るにつとめて事實を曲げざらんとし、またつとめて小說らしく、世人に讀まれやすくせんとしたるが故か、それかあらぬか調なくて興味索如文字拮屈にして、作者が苦心の多くは失ひ了れりといふべし。定價三十錢。

○四の緒

四人合作
春陽堂發兌

四の緒は四文士の作になれる五品をあつむ。『董料理』『三個條』は紅葉山人の作、輕妙、圓滑、並し淫靡卑猥の故を以て、出版自由なる米國に於てさへ、發賣差止めとなりたりボッカチオの『デカメロン』中より拔摘意譯したるものなり。柳浪子の『白百合』眉山人の『左褄』、一は痴漢戀に狂死するの話、仕組は何か諷刺的の趣意あるらしく面白し、一は例によりて艶しく仇めかし。鏡花の『鐵撃夜中錄』は慘澹慘憺、されど着想文字共に『外科室』『なにがし』よりは劣れりの感あり。まかし五作は共に文士それ〳〵の特色特調をそなへて、大絃嘈々小絃切々、四絃の諧調は嘯噪の妙聲をふせり。正に銷暑清涼を呼ぶの友。定價二十錢。

○日本名勝地誌第六編

野崎左文氏著
博文館發兌

本編に於ては山陽道の地誌名勝古跡を遍く網羅し、たゞに旅行者の爲に便利あるのみならず、また以て地理學者を裨益すること多し。而も又此類の人ならざるも時節柄清風綠陰の下、之を繙き、かつ卷末附錄として載する處の吉田某が『筑紫日記』、柳北翁の『航薇日記』を讀まば、未だ門外百里の地を踏まずして名勝舊蹟に遊するの思ひあらしめて、銷夏の便りたること必ずや尠しとせず。定價一册三十錢。

○なにがし

紅葉、鏡花合著
春陽堂發兌

「なにかし」とは、曾に讀賣新聞紙上に、紅葉及なにがしと署してものしたる、『豫備兵』と『義血俠血』との二篇を一括して上梓したるものゆゑに、、書名をもかくはものしたるなり。さなにがしなる文士は、今に至りて紅葉門下出藍の譽ある泉鏡花氏なること公になりぬ。『豫備兵』とは時節に投げたる一題目、醫學生風間清澄の深沈寡默にして、突飛なる猶大馬達の目には怯懦無氣力の青二才と見えて、其實、正に事あるに臨めば、剛膽沈毅の豫備少尉なること、風間直といへる豪放奇拔の一老婦と、圓讓の尖婉なることは（其擧動のあまり淑女らしからず描かれあるにもせよ、但しかくせずば一篇の結撰のまとまらぬ故か。）一篇の重役者なり。全體よりいへば讀者をして、、起手の重々しきに望蜀がしめて、結尾に近づいて、あまりにアツケなきに失望せしむとやいはん、且つ時節物を描くに事實を多く誤りたるは落度なり。『義血俠血』に至りては、其意匠といひ、其文字といひ、遙に前者に優りて、明月清風の下橋上四顧寂寞たる時に、奇骨稜々たる俊才村越欣彌てふ不運青年と、豪放豁達なる美婦瀧の白糸てふ水藝太夫とが邂逅するの條の如き爽然蕭灑たるあり。世帶染み來りたる白糸が、情人の學資とて貢ぐべき百金を賊手に奪はれてより、半知半忘の心的衝動に驅られて思はず知らず二人を兇刃に殪して、賊をなすの條の如き慘然悽愴たるあり。其悲壯沈痛なる近來出色の好文字といふべし。兩篇ともに紅葉鏡花合著と稱す、然れども其幾分が紅葉にして、其幾分が鏡花なるかは知られども、紅葉以外に特出する文字着想あるは、既に『外科室』に於て其御手際に感服したる多望の文士鏡花氏に成るものならん。鏡花氏の文壇に出づる未だ昨今にして、其才と其文とは、既に今日文壇の新風潮界に立ちて將に一家の名をなさんとす、好文士多望なりといふべし。然れどもたゞ恐る世が俄に彼に大家てふ不祥なる名を與へて、彼をして夭折早退せしめんとを。定價三十錢。

○水車

江見水蔭著
春陽堂發兌

『水車』てふ題目の下には、水蔭が筆になれる七種の作を一括す、中にて『兜の星影』は最も長篇にして、多作する水蔭が作中にての最傑出の小說にして、豪壯なる處、優美なる處、悲壯なる處、夫々好文字好着想を有す。『夏の館』短篇といへども、またあはれによむべき節あり。『雪折竹』『燒山越』『斷橋』『温泉』『狂詩人』いづれも面白し。毎篇の末に、年少俊才が詩歌を挿みたる、これまた興を添ふるもの。定價金三十錢。

○寫眞術

村井弦齋著
春陽堂發兌

輕妙で爽然で、すら〳〵とかき流したるが弦齋の特技妙處といはゞ、此寫眞術の如きは、其尤も輕妙で、其尤もすら〳〵としたるものにて、弦齋が傑作とやいふべき。石部金太郎、浮田茂吉、早取義取など名詮自稱の人形を（いづれも人間としてみれば片輪者なる）、作者が黒頭巾で、輕々と操りまわす其筋書は女でも小供でも成程と分れば、其向きにはうけ宜かるべし。まかし一口にいへば、これは十年前に流行た小說をつくりなり。定價金二十五錢。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

女學振作論の反響

平素あまり新女學に熱心なりとも聞えざりし方面に就きて、殊更ら其反響に耳を埀てゝ聞けば……

◉女子教育の發達　（德島新報）

今日の教育上其發達を企つべきもの一にして足らずと雖も、就中女子教育の如き尤も其要を感ぜずんばあらず……女子は人にして人の待遇を受けざるもの少しさせず、殊に教育に於て然り……世は男子のみにて渡れるものにあらず…今年今時は舊弊を洗ひ去りて女子を引立てゝ男子を扶くるに足るべき完全の教育を施すべき好期なり…然るに獨り女子教育のみ昔日の日本觀あるは果して如何、近頃ろ余輩の痛歎に堪へざる所ろ也。（八月八日紙上）

◉女子德育の頽敗　（輸入日報）

人の大倫は男女の關係より始まると云ふなるに、上流大門の主人公等多くは獸欲の穢らはしきに充たす、出ては妓を擁し入ては妾を蓄ふるを男子の器量とか稱へ、甚だしきは正圏子女を疎外して顧みざるものあり、倫理の大本先づ家庭より敗る……上流先づ濁りて下流の澄まざるを望むは固より得べからず…此間に在て中等社會の家庭比較的稍や其淑德を有つの觀ありしに、是れすら近年は著るしく隨落の傾向を生じたり……倫常道德の扶植は必らず宗教の力を待つ、一婦一夫を天啓の原則と定め、邪淫を以て畏るべきの神戒に數ふる耶蘇教國の習俗に比すれば、吾人は殘念ながら我社會今日の狀態を列國の耳目に曝らすことを羞恥とするもの也……儒道の女今川的庭訓は今尙ほ少數の家に行れて婦道を敎ゆるに其効大なりと雖も、男に許るして女に禁ずる事に其可を知らず、然れども今日我社會に於て女德の存在を尋ぬれば、第一、此女今川的家庭、第二、佛法の十善會、第三、耶蘇教信者間のみ、之を外にして眞正貞順の德を當世の婦女に望まんとするは、木に縁て魚を求るよりも難たし。（八月十五日紙上）

◉小學女教師　（山陽新報）

小學校に於ける女教師使用利否の問題は、全國を通しては、尙ほ未決の問題たるが如く、東京、長崎、高知、其他の數縣に在りては寧ろ積極に屬し、我が岡山縣に在りては、消極的方針たり。若し夫れ余輩の考ふる所を以てすれば、幼稚園は論なく尋常小學までは、女教師を用ふるの利、決して男教師を用ふるの利に劣らざるを見る。區々たる小尋道に違ふて女教師可廢を決行するが如きは、寧ろ大早計にあらずとせんや。尋常師範學校に於る女子部を廢してより、既に三年、當局者の可廢熱少しは冷却したらんとを思ひ、敢て少しく再考を促がす。（七月卅一日）

◉今後我國婦女子の心得　（佛教新誌同學）

女子の職務が裁縫炊事にのみありとすれば、最早や言ふべき事なしといへども……こゝに一つ悲しきは、もとの丸髷振袖にかへりしとて、其心まで因循姑息、昔のまゝにせよと云ふ有樣あるに至ては……婦女子の職務は只だ裁縫と炊事にあり國の事も世界の事も知らでよしと言ふ如きに至りては、大なる心得違といふべし……今の世に於ける婦女子は、裁縫炊事の心得は固より言ふも更なり、深き文字の嗜みなしと言ふとも、其知識だけは、よく世界の何者たること、國の如何なるものなることを心得置かざる可らず、云はゞ根抵は日本と云ふ事を忘る可らざるも、今少しく外國の事にも通じ居りて、よく夫の助となり、又其子を育て上る丈けの心掛はなかる可らず……即ち今後の婦女子は、よく世界の大勢は如何にありや、日本今日の有樣は如何にありやと云ふ事位は心得置きて、婦女子の任務を盡さゞる可らず。（第五十六號）

◉女學生の風評

吾儕多年の經驗によるに、女學の隆盛に趣かんとする時と新聞紙上の驗く多け

なる時節とには、兎角女學生の醜聞なるもの遝りに風評せらるる也。近時、漸く各新聞紙上に此の風評の現はれんとするを觀るは、何の徴候ぞ、

開化新聞、八月十六日紙上　又しても女學生の俳優狂ひ
岡山日報、七月三十日同　女教師を藝妓代り
大阪毎日新聞、八月一日同　女學生の醜聞
紀伊毎日新聞、八月三日同　女學生の醜聞
岐阜日々新聞、八月十日同　藝妓出世して教員となる
東奥日報、七月七日同　女生徒に不似合
開化新聞、七月廿八日同　女學生
開化新聞、八月十四日同　女學生の不品行
扶桑新聞、七月廿七日同　女學生の不行跡

細かに其記事を通覽すれば、濁たるもの、空たるもの、遺げなるもの、遝りごとらしきもの多し。前年の女學生醜聞なるものも亦斯の如かりしことを憶みれば、則はち其消息を察するを得べし。然れども、一犬の吠ゆるは虚にして、萬犬の傳ふるは實也。風評喧傳して意外の妨障を生起するの經驗に鑑みて、當路者は顧ぶる警戒せざる可らず。

●稀有の大探險家及び夫人

人類の起原の、阿部亞細亞高原、若くは幼發拉底河畔一帶の地にあるべしとは、是まで一般に信ぜらるゝ所なりしが、近頃に至り、オーギユーステユー、ル、プロンゲエオンなる一博士出で來り、嘗屢一變、意外にも、その、中央亞米利加メキシコの邊にあるを主張せり。同博士が多年實地探險の上、種々の材料により、研究せる結果によれば、古代エヂプトの文化は、全くメキシコの文化にして、メキシコ人の、その地に移住せるより輸入せられたるものゝ如く、これ等の事實は、兩國に用ひられし象形文字の比較研究その他種々の證跡により、明に知るを得べしといふ。なほ同博士は自らメキシコの地に於て、舊約創世記中有名の殘人――アダムの子アベルの墓を發見せりと稱し、また今日まで世界不思議の一つに數へられし、エヂプトのスフィンクスの如きも、これアベルの妻が亡夫アベルを紀念せんとして設立せる、碑石の類に外ならずと斷言し、これが證據を列擧せり。然らばかの曾て罪業なく闇なかりしエデンの樂園も、これらの邊にありしものなるべきか、なほ同博士が同地にある古記錄を調査せる所によれば、ノアの大洪水ともおぼゆるもの、記事、またその内にありといふ。そは兎も角、プロンゲエオン博士が、かゝる未曾有の一大新說を稱道するに至りしまでの困難辛苦は、實に非常なるものにて、前後十二年の間、人跡甚だまれなる土地に入り、古代人類の遺跡遺物を精査し、また是等のものに刻まれある文字の、讀み方を工夫する等、決して容易のものに非ざりき。此の長年月の間、如何なる嶮坂崎路をも辭せず、常に博士とその行を共にし、その四手となり、慰藉者となり、遂に博士をして、滿足の結果を得、今日あるに至らしめたるは、全く氏が夫人の由にて、巴里地學會は既に同夫人が此くして學術のためになせる、非常の盡力に酬ゆるの意を表せんため、預れてより同會に保有しある有名なる探險家を集めたる寫眞帖のうちに、同夫人の像をなさめ、以て其名譽を不朽に傳ふる都合になれりと。何時もながら、大事業に婦人の力預りて多きもののあるを見るべし。

●本年の米作

經濟雜誌記者曰く、本年我邦米の收穫高は、昨年に比して三分の一乃至二分の一（三割三分乃至五割）即ち千三百万石、乃至千九百万石を減ずべし。果して然らば本年米價の騰貴は免かるべからず。而して一石十圓にて之を海外より輸入すと假定せば、一億三千万圓乃至一億九千万圓を海外に向ひて支出せざる可らざると也。今や我邦は二億円の償金を清國より得べきを以て官民得々たりと雖も、本年の米作果して不作を皆れば、其一半を失はざる可らざる也と。去歳、近年に稀なる豐作あるや、時事新報は曰く、豐實多からざるにあらず、天、特に此の豐年を與へて其の戰費を償はしめて尚ほ餘りありと。然るに、本年に至つては、即はち如此し。世事不定、固より測知す可らずと雖も、今回、昨豐、年を易えしこそ尚ほ天幸なりと言わめ。左れど、臥薪嘗膽の今に方りて、不運即はち尚斯の如くば、同胞、いよく警戒せざる可らざる也。

津田仙氏は曰く、すでに斯く決晴せし上は、毫も損失なけんと。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◉御門跡の婚儀

其の景况を「法の話」第八十六號に記載せしものあり試みに左に轉載す。

新御門跡と三條華子殿との御祝儀は、愈去月六日を以て其の式を擧げさせられたり、然し現今の時勢餘り盛大にせんは憚多しとて、三條家とも御協議の上萬事質素と云うことにて、枳殼邸内燕申堂を以て假に三條邸とし、當日午后三時頃新夫人には隨從の人々を從え、馬車にて御本山臺所門より玄關に御通り、此處に儀式掛りの男女出迎え、黑書院にて小憩の上兩堂拜禮、終て黑書院へ復し引繖き花の間に於て御儀式あり、其より大御門跡、御裏方、及靈壽院以下の者御連枝に結緣の御盃事ありて、更に枳殼邸閬風亭にて祝宴ありたり、御媒介は岩倉公爵名代、家扶岩崎蔑元氏にて、三條家よりは母堂治子、三條公爵、並に富田家扶等孰も其の式に列せり、翌七日新御裏方には白書院にて事務員(裏授以上)へ初對面、及在京都の門徒、講頭、商量員等へ初禮ありたり、但し目下惡疫流行の折柄なれば、御親族へ御披露の宴會は秋冷の候まで、御延引あそばされたるよし。

◉孝貞兩全の賢婦

東京市小石川區小石川大塚窪町
篠　き　よ
(五十二年)

幼にして孝順常に傭作以て衣食の資を助け長して德次郎に嫁し克く其姑に事ふ姑幾許もなくして死し夫亦次で病み不幸頻りに臻り家計窮厄に陷るも躬能く艱苦に耐へ晨に耕耘に出で夕に病床に侍し志操の堅貞看護の懇到二十餘年一日の如し夫歿して寡居節を守り祭祀之れに事ふること猶生前に事ふるが如し且所出の家兩親倘在り傭賃の餘皆之を奉し承歡の狀其家に在るの時と異なる事なし洵に奇特とす依て其賞として金五圓下賜す

明治廿八年八月一日

東京府知事　三　浦　安

◉支那最初の女醫學士

黨金許と云へる支那の一少女は此度米國ヒラデルヒヤ府の女子醫學校を卒業し學位を得て歸國せんとすと。抑も此女子の米國に渡航せるは今より十一年前、漸く十二三歲の頃なり。固より英語を解す可き筈なく、故國を辭し米國に向はんとしたる時は其食物の名すら知らず不自由此上もなかりしが、幸にホヰトニー博士夫妻に船中にて懇意を結び、博士も少女の勇氣に感し且は價なき身を憫みて種々に親切を盡し世話しければ黨金許は之が爲め意外の便利を得たり。米國に着するや先づデラウェーアの一校に於て語學を學び、前記の醫學校に入學し孜々として勉勵せしかば嶄然頭角を顯はし校中の英才を以て稱揚せられたり。此間父の病氣に罹りし爲め一度歸國せしが再び渡來して修學し、終に昨年五月業を終り續でヒラデルヒア病院に於て臨床醫學を硏究し實驗を積みたり。黨女は特に婦人、小兒、眼科の三學を學び歸國したる上は福州に專ら婦人のみを治療する病院を開き兼ねて眼病治療に從事する豫定なりと云ふ。扨て此少女が斯くも志を立て海外に渡航して學業を修めたる原因を尋ぬるに、少女の祖父は支那人中にて最も早く耶蘇敎に歸宗したる一人にして、其子孫にも嚴に同敎を奉ぜしめ、旣に少女の父は宣敎師となり、又少女の兄及び姉も布敎に盡力し居り、此少女の修學せるも其敎會より撰拔せられたるものなるよし。目下支那上流社會の婦人は女醫の必要を感ずること甚しければ一朝此女にして歸國せば業務の繁盛期して待つ可しと現に同女自ら人に語りける由實に米國に於て醫術の研究を爲せしものは黨金許と今一人のみなりと云ふ。(七月廿六日時事新報)

編者附言。在築地ドクトル、マッカーテーの養女ドクトルキン女史は支那人にして、現に女醫たり。本文記載する所ろ少しく事實に違ふと雖ども、其大體を失はず。

◉チウ〳〵タコカイナ

お小供衆がキシヤゴなどを數へる節に、チウ〳〵タコカイナと云つてゐますが、中々面白うございます。此樣な數へ方はまだ澤山ありますから、今お話し致しませう、覺えたら之で數へて御覽なさい、また別の面白味があります。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

東京地方では　ハマグリハ、ムシノドク。
越後新潟では　ヤマノウエノナンサマ。
同　長岡では　アクキヤノ、カキツバタ。
紀伊地方では　ヤマミダテンデノヘナ。
對島地方では　オオサマノ、ケケゴロモ。
山口地方では　ハマサキノ、ウチセリバ。
同　ヤマブシノ、ホラノカイ。

これは字を基として數へるのです、さて字が十ありますから、一字に一つ宛數へれば十になり、二つ宛數へれば二十になります。此外にまだ、ハツユメニタカラブチ、または、キクノハナウワクシヤなどゝ云ふのがあります。

東京地方では　チウ、チウ、タコ、カイ、ナ。
西京地方では　チウ、タア、カイ、ノ、トウ。
廣島地方では　フイ、フイ、タコノ、カイノ、ジウ。
伊勢地方では　ジウ、ジウ、タアコニ、カイマノ、トウ。
山口徳山では　フク、フク、タコ、カロ、ジウチロウ。
同　大津では　フン、ミロナ、タア、カイ、ジウ。
同　萩では　イユウ、ダチヤ、チヤワンニ、オイテ、ユク。
同　地方では　チヨフタガ、オチヤヤノ、ハシテ、ワタルチフテ、コケタ。
山形地方では　トオロア、ケエコノ、トン、アヤカヽ、シリデッポ。

これは句を基として數へるのです、さて句が五つありますから、一句に二つ宛數へれば十になり、四つ宛數へれば二十になります。此外にまだ次の様なのがあります。

アワ、サマノ、サクラ、バナ、ウツクシヤ。
ヒイマ、フイマ、フンダラ、ダルマノ、エンノシタ。

さて次にお話し致すのも、矢張句を基として數へるのですが、今度のは句が十ありますから、一句に一つ數へれば十、二つ宛數へれば二十になります。其外如何數へてもよろしいのです。

山口萩では　イーセタ、モーモク、モクタイ、

チヒロタ、チンナア、ホイ、ホオラン、ランクウ、コロリン、ホイ。
同　酒田では　インモタ、モンモタ、モクメイ、チナアロタ、チナンナア、ハア、コオラン、ランクウ、コロリン、キイーア。
千葉地方では　ヒンマ、フンマ、フンダラ、ダルマ、アサカラ、バンマヂ、アカイ、ダキン、カアリ、ドウシ。
（右中央新聞八月七日紙上、竹貫佳水氏の投書に據る）

◉誤り易き言語

白皙(はくせき)　二字にてしろき義也、これを晳の字と心得てはくてつと讀むは誤
容喙(ようくわい)　喙の字を心得たくをいるなどいふは誤
懶惰(らんだ)　らいだと讀む人あり注意すべし
義損　義捐(ぎえん)　ぎけん、きけんといふ人あれどさる音はなし
破綻(はたん)　はてい、はぢやうなど讀むべからず
潑剌(はつらつ)　はつしと讀むは惡し
絢爛(けんらん)　じゆんらんといふは惡し
熱鬧(ねつたう)　ねつしといふは誤
避暑(ひしよ)　へきしよと讀むは百姓讀なり
軒輊(けんち)　けんてつと讀むは惡し
計劃(けいくわく)　けいぐわといふ人あれどぐわと讀むときは繪の事となる計る意のときはくわくなり
發起人(ほつきにん)　はつきといふ人多しされど古來呉音にてほつと讀むが慣例なり
祗候(しこう)　麝香間祗候などは示偏に氏の下に一の字ありてしの音なり神祇（氏の下に一の字なし）の字と心得てぎこうと振假名などするは誤りなり
適當(てきたう)　ちうたうと讀む人あり注意すべし
[illegible](ぜいとやく)　きとやくは間違ひなり
斡旋(あつせん)　斡はあつの音にて斡天旋天などいひてめぐらする意なりこれを幹の字と思ひてかんせんなどいふは誤甚し若し幹事が周旋するなどいふ意ならば斯る熟語はなし
煙筒　これはきせるの事なりけむりだしならば烟突なるべし烟筒より失火しなどいへば煙管より火事の起る意となる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

膏肓（かうくわう） 盲（めくら）の字さ心得てまうさ讀むは文盲の極なり

好悪（かうを） 悪の字にくむの意なるときはをと讀むべし

躑躅（ちつちよく） 滯の字さ思ひてちつせふさ振假名したるを見たり

嗚咽（をえつ） 咽は噎に同じくむせぶなり泣きて聲のむせぶなりをいいん、をえんなどいふ人あり

銃砲 ほづゝの字は石偏なり火偏の炮の字さ誤る人多し炮はつゝみやきなり

選擧 えらぶさいふ字は之撰（しんねう）なり手偏の撰の字を誤用するこさ常なり撰はつくるなり撰文作文なるが如し

輸出 輸入（しゆすゐ、しゆにふ） これをゆしゆつ、ゆにふさ讀むこさ百姓讀の極なれど今更致方なかるべし

祝詞、祝文、祝盃（しうし、しうぶん、しうはい） 祝の字いはふの時の音はしうなり年始の御祝詞（ごしうし）祝言の盃（しうげん）などにて知るべし志ゆくさいふさきは神主の事さなるされどこれも今將改むべからざるか

運搬 搬の字移す意なるさきは俗用にてやはり音は般なりこれを正音にしゆくなど讀む人は角を矯めて牛を殺すことゝなる

模造 模の字は木偏にして型なり形を寫して作るなり手偏の摸の字さ誤る人多し手偏なるは捫也ありて指にて索くることゝなる

（右、宮城教育雜誌紙上、大槻文彦氏の談話に據る）

◉誤り易き字音

前項に相ひ對して、澁橋醉漁なる人が『日本』に投寄せしものを見れば、

剛愎（カウロツ） 下の音は弼なり復（フク）さ誤る

閲墻（ゲキショウ） 上の音は礔激の切なり睨（ゲイ）さ誤る

嗔然（シン・ゼン） 上の音は瞋なり顚（テン）さ誤る

巾幗（キンセキ） 下の音賓なり節（セツ）さ誤る

諮仆（フタフ） 上の音匐なり復（フク）さ誤る

覬覦（キキ）・ 音は寄希なり歔欷（キユ）さ誤る

慫慂（ソウイヨウ） 音總勇なり上字從（ジウ）さ誤る

瞠乎（サウコ） 上の音は鎗なり儻（タウ）さ誤る

老嫗（ラウアウ） 下の音は襖なり慍（ウン）さ誤る

雨雹（ウハク） 下の音は瀑なり砲（ハウ）さ誤る

講傳（クヮデン） 講は訛に同じ僞（ギ）さ誤る

提撕（テイセイ） 下の音は凘なり斯（シ）さ誤る

泛駕（ホウガ） 上の音は捧なり汎（ハン）さ誤る

龍準（リヨウセツ） 下の音は拙なり准（ジユン）さ誤る

睚眦（アイサイ） 音は愛柴なり涯豉（ガイシ）さ誤る

斗杓（トヘウ） 下の音は標なり勺（シヤク）さ誤る

內帑（ダイトウ） 下の音は儻なり帑（ド）さ誤る

一抔（イツホウ） 下の音掊なり杯（ハイ）さ誤る

汚衊（ヲマツ） 下の音は袜なり蔑（ベツ）さ誤る

副 そへるさ讀むさきは音ふなりされど輸入をゆにうさ讀み習はせし如く方今廣く誤傳せし故正音にては却て人耳に入り難き憾なりたり

◉言志の調べ

詩歌は只だ志を言はば足れりさするものあり、近頃ろ五千句を集めて公版せし某發句集のうちに、左の如き名吟あり、讀者試みに讀解判批せよ、

商賣はられればくゐん提灯や
おきのこずなしれになる國の忠義
種物こまかきものはけしの種
おかま逆さも旦那ばからはかな
のぎよのざくおあらず小雀きよろり
夜晝みづのうゑでくらすはせんど
ぬつもにがいきにぬるわ艸ぎの虫
斗るものにて安い物のはばんちや
ひささんだい北軍じんにかなわず
あきなゐ牛の漲れしりなごになる
春すぎてあわせころしかやにばける
百姓のたからいゐさもくろつち
ひに當みるわゆきさ氷かな
かなやま金あるごのやまも石ある
百姓くらしはちがつだいのよう

◉たのしきことよ

鼎軒歌つて曰く、

たのしきことよ　今ぞ知る　我來し道に　奔ありき

心のまゝの樂は　人の奴隷の　結ぶなる　榮華の夢に、

まさるなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

獨立單行の氣字磊々として。而も抑音太だ妙へなり。眞さに、近時の秀吟と云ふべし。

●想と評

民之子、近ごろ二大女嬢を示す。一は、即はち、戀と罪との流行を甚だしく讃惡せるもの也。他は、即はち、情死と平等觀とを甚だしく賞讃したるもの也。反照照應、極めて巧みなりと言ふべし。

◉前川行興女學校に女子の喪務を說く　と去月大阪浪花女學校卒業式に於ける演說者の述ぶるものに見るに、中に曰へらく、一家の内相となりて世に立んとする婦女は、何徳の行を行ひ以て一家の富を計らざる可らずと。

◉香川高等女學校　の改良を計畫し、有志去十二日集會して寄附金八千圓募集の案を確定せり。

◉下田歌子女史　去る十九日歸朝せられたり。

◉可憐工女　と題して紀伊毎日新聞七月廿四日紙上に記載するものに據れば、某製糸場の工女、見番人の苛酷虐待に耐へず、生きて苦悶を受けんよりは死するに如かずと溜池に身を投じたりと。

◉貴夫人の美擧　土方子爵夫人亀子、三島子爵夫人和歌子、西郷伯爵夫人清子、大山侯爵夫人捨松、樺山子爵夫人登喜子の各貴夫人は、今回征清役に從ひたる軍人中戰死の未亡人にして、能く婦道を守り貞操高潔の聞ある者に對し、土方夫人より曾て　皇后陛下に奏請の上御物(御手文庫)御下賜を請願し下賜の榮を得、之を寫許さして將代の紀念に一品に成れる紀念品一個宛を贈り、以て追悼の情を致し、且つ其の夫の在職中の戰病死に殉せる事蹟を調査したる冊子を頒たんとの企てをなし、目下各府縣知事へ宛て其調査書を添付し一般の調査方を依頼ありたる趣きなり。

◉佐人自ら進めて死刑執行人となる　墺國ウインナ府にて左の願書を監獄總督に提出したる女子あり、

妾は今年二十八歲にして當府の住民なり今回死刑執行者の補欠に際し自ら其任に當らんことを希望するものに御坐候妾が女性なることは此職務に向て尤も恰好なるを信じ候凡て罪人は卑惡にして自ら爲せる行爲に對して罰せらるゝは自業自得なりとは云へ其死に就くの時に於ける其心情に至ては頗る憫むべきものあり去れば其死刑を執行せらるゝ時に當りムクツケき男子の手に依らんよりは嫻雅たる女子の手に於て從容として限りなき黃泉に旅立せんことこそせめての本望なるべし云々

◉ホンガリー國　の郵便配達夫は、多くは女子なり。

◉大坂の醜業者議員　醜業の全廢は、先づ公娼を殊するにあり。而して、公娼の禁止に先だちては、醜業者の公民權を制止せざる可らざる也。今ま、大坂に於ける女郎屋の亭主が公役に關係する所をきくに、左の如し、(四月調査)。

市參事會議員	新町廓茨屋(播與席)	佐野與兵衛
同候補者	北新地同(鍛冶屋)	井上長平
市會議員	同　(立亭半)	堀川理兵衛
同候補者	難波新地同(桐席)	阿部彌七郎
同	新町廓貸座敷(京屋)	濱田源八
同	松島廓富屋(南川席)	天川三藏

◉万國婦人矯風會大會　六月中旬より英京倫敦クイーンス、ホールに於て開かれ、會長ウヰラード女史も米國より渡英、此會に臨席せられたり。

◉京都婦人手藝會　在京都なる壬生基修伯の嬢に郵便守館京都分局長となりし以來深く婦人の職業に付き考慮する處あり。今回渡邊男爵の息環氏一旦米國より歸朝、再び渡米する事となりしより、同氏の婦人及び其家令家扶の妻女をはじめ、一般婦人學業として、レース製造業を起し各々之に從事せしめ、其製品は之を米國に直輸することにせんとて、過日來分局にて評議會を開くこと數度に及びしか、愈々來九月一日より今出川の分局内にレース教場を開き、費用は事務共有積立金より支辨することゝし、教授は速成を旨とし、木綿レース二ケ月麻布レース二ケ月絹レース二ケ月都合六ケ月にて全科を卒業せしむることゝし教官をも聘して之を京都婦人手藝會と稱するよし。

◉相愛女學舍　伴直之助氏の姉大島佳子は中原千代子と共に、題名の會を創立し、東京神田猿樂町二十四番地に置く。

◉彦根町立高等女學校　前守隅吉氏校長たりてより卿々として隆盛に向ひたる彦根町立高等女學校は、七月一日盛んなる開校式を擧行したり。

◉女を絕つの願掛　河内生駒山の聖天を信仰するものの内にて、其願掛を爲すもの、皆曰く、

私、一生涯の間、女を絕ちます故、何卒專生の願望をかなへて下され。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校廣告

明治女學校は、民間同志者の協力により、明治十八年に於て創立せらる。爾來ただ同志者の精神により維持せられ、現在及將來之を變ふるをなし。教育の道に於ては、特に信ずる所のものあり。必らずや之に殉して吾校の使命を盡さんとを欲す。世上の父兄もし信じて其妹女を托せらるゝとあらば、吾等は歡んで之が教育の任を負はん。

校則

第一條　本校の課程を分ちて普通科及高等科となす

第二條　學年は毎年四月下旬を始とし翌年四月上旬を終とし一學年を分ちて三期となす如左

第一期　四月廿一日より七月二十日迄
第二期　九月十日より十二月廿五日迄
第三期　一月十日より四月五日迄

第三條　授業時間は毎日大凡五六時間にして一學時を五十分と定む

第四條　本校休日は、日曜日、月曜日、國祭日、皇后陛下御誕辰、本校紀念日、冬季、春季、及夏季の休業とす

第五條　武道の一科は隨意科とし心術修養の目的を以て有志者をして修學せしむ

入退學

第一條　入學は每學年の初め之を許す但し相當の學力ありて現在級と並進し得るものは何時にても入學を許す

第二條　入學志願者は其の志願の學級に對する入學試驗を受く可し但し小學高等科三年卒業のものは無試驗にて普通科第一年に編入をし同全科卒業のものは同上普通科第二年に編入す

第三條　入學の節は當市內在住の父兄親戚若しくは身元慥かなる知人を以て保證人となすべし

學科

（一）普通科は邦語を以て婦人に必用なる普通實用の學藝を授け普通科卒業の上更らに高等の教育を受けんとを欲するものゝ爲めに高等科を設け又普通科、高等科規定の全課目を修むる能はざる事情あるものゝためにに別に撰科及專修科を置く

（二）普通科の修業年限を四年とし高等科を二年とす

（三）隨意科として英學科を設け專修者しくは兼修するとを得せしむ

（四）直ちに普通科に入りがたき者の爲め臨時に補充科を設くることあるへし

高等科

（一）高等科は當分文學部のみの設置にとゞむ

（二）高等科文學部に於ては專ら和漢英の三學を授く

（三）高等科に於ては主として學生の獨學啓發を旨とすと雖ども教師直ちに授業するの時間も亦尠からず即はち和漢學ともに每週各三時間以上英學每週十時間以上

學費

（一）入學の際束脩として金二圓を納む可し

（二）生徒は每月五日迄に授業料を左の割にて納む可し

普通科　一圓二十錢
高等科　同前
撰科　正科同額

專修科

英學（壹圓）　國文（半圓）　繪畫（半圓）
裁縫（半圓）　女禮（半圓）　音樂（琴三十錢、オルガン一圓、ヴワイオリン一圓）　武道（三十錢）

但し正科若くは撰科生にして專修科內の科目又は隨意科を兼修するものは一學課毎に金二十錢を納むべし。尤も音樂の兼修は其專修と同額の月謝を納むべし。

（三）二ヶ月以上欠席するものは最初の一ヶ月の授業料を納む可し

（四）塾生は毎月食料として金三圓塾費及油炭其他雜費として同八十錢を每月五日迄に納む可し（但時宜により增減あるべし）

東京麴町區下六番町六番地

明治女學校

松村介石著

再版

婦人のかゞみ

定價廿五錢
郵稅四錢

本書は女生が一生の方向を導ぬる緒論より筆を起し。美人論にて終ふ。論ずるところ廿有題。凡そ女學生とし、妻とし、女とし、教師とし、記者とし、看護婦とし、獨身者とし、事業家として學得脩養すべき件々網羅して遺さず。要は婦人をして萬界を通じて理想的たらしむるにあり、議論着々實際を穿つ。日下女界濛々霧深し、此書實に羅針盤たるべし

再版

基督の心

定價十錢
郵稅二錢

發兌　東京新橋出雲町　警醒社書店

文學界

第卅一號目次

月かげ　其上　一眼寺（氣死）　其中　無動寺谷（自殺）	殘花
こよひの柳蔭	天知
紙帳何處にある	秋骨
わが戀	醒雪
我おもしろの記	こてふ
こさしの夏	藤村
一夏百句	露石
紙雨集	酒竹
西樂月旦	あやめ

寄書

紅覽、ひなの夕暮。青き月。川納涼

時文

一新思潮　新刊くさぐ　音樂家コンツキ氏

一册六錢市外郵稅五厘

發賣所　神田南神保町十五番地　文學界書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特得
妙技

音樂治療の公告

樂手は天成にして造りがたし。美音は造る可らず生れざる可らずと言ふものもありと雖ど、若し天の則に隨ひて巧妙の治療を施こす時は、彈指、御使の如く自由に飛び、發音、天の音樂の如く美妙とならんと驚歎の外なし。野生多年樂を業とし、博士エルドリッヂ氏と同もに多種の治療に從事しうち、偶々音樂者の爲めに施こすべき一種巧妙の治療術を特得し、久しく之を試みて着々効驗を奏せしにより、玆に初めて世上に公告して、有志の需めに應ず。

第一　樂手彈指の治療

奏樂者第一の辛苦は、彈指の硬張りて自由ならぬとにあり。就中、舶來のピアノ、テルガンは西洋人の爲めに適應せしめて、一オクタブの距離遠ければ、指の餘りに長からぬ本邦樂手の爲めに不自由の事多し。余は、之が爲めに一種の治療を施し、指を長くし、硬張りを軟らむるの妙術を行ふべし。

第二　發音美聲の治療

音聲の最とも麗はしきものは、人の聲音なり。聲音美ならずば、奏樂ありと雖ども、妙の過半を失なはん。余は、耳、鼻、口、喉の四科に一種の治療を施こし、所云る音樂の耳を調のへ、且つ、美聲發音の源を清くすべし。泉涓玉を轉ずるもの自からにして流るるに至らんと必せり。

右二種の治療に於て有志者の需めに應ず。

横濱
堺町　六角謙吉

日本宗教

第壹號目錄

七月出版

發刊の詞

論說

邦人の宗教心　三宅雪嶺
泥舟先生に槍道を聽く
所懷　巖本善治

史傳

山崎闇齋　戶川殘花
支那の回々教　青柳猛

雜錄

希臘教會の組織　小西增太郎
和歌に於ける宗教　湯谷紫苑
東京感化院

思潮

本願寺の聖人（反省雜誌）
日本のユニテリアン（宗教）
佛教の因果應報非眞理說（加藤弘之氏）
神道者大道（闇夜の灯）
佛教の哲學及信仰（佛教）
靈國の國粹派及西洋派（心海）
成田雜感（加藤熊一郎氏）
海江田子爵に答ふ（釋雲照氏）
ポンテチヒラト（植村正久氏）
通俗禪者用書（禪宗）
日本弘道會（日本弘道叢記）

物質主義の宗教（姉崎正治氏）
基督教と國文（早稻田文學）
佛教歷史研究法（鷲尾順敬）
精神の高雅、心志の獨立（植村正久氏）
即心即佛の實術
私德及び公德（渡邊常吉氏）
万象是佛、是大乘（四依一六氏）
占領地傳道一策（教界評論）
美術と宗教（松本源太郎氏）
大師堂建立因緣（日本一）
宗教の物質心靈二主義（姉崎正治氏）
宗界近時の大勢（早稻田文學）
人生三論（板垣退助氏）
道德退守進步（西村茂樹氏）
大乘非佛說（佛教）
講壇の牧師（海老名彈正氏）
宗教組織論
宗教の必要（內村鑑三氏）
西村醉處と永井悟由
大乘非佛論の一箇意義（四依一六氏）
時宗元寇を防くの氣力
新版圖內の布教（野口勝一氏）
默想の妙諦（東洋基督教）
佛教家の急務（哲學雜誌）
朝鮮傳道
朝鮮各道便覽（教育時論）
不惡口戒（釋雲照氏）
軍隊布教
往生の生因（日本一）

不言即實行（宮川經輝氏）
十善戒（伊達隆辨氏）
宗教的東方問題（女學雜誌）
宗教とは何ぞや（丸山通一氏）
宗教的熱心と自由討究（六合雜誌）
ザラツストラ教の教理（木村鷹太郎氏）
祓除の德（惟一）
葬祭と佛教（法の母）
謗法を禁む（法王）
宗教家の勇氣（澤柳政太郎氏）

新刊雜誌紹介

十善寶窟○三寶叢誌○佛教史林○佛教○禪宗○四明餘霞○密嚴教報○教友雜誌○日本一○眞教○反省雜誌○正法輪○傳道新誌○護法○佛教通俗新聞○禪學○彌陀の光○能仁新報○法の母○御國の母○六合雜誌○眞理○宗教○宇宙神教○心海○正教新報○基督教新聞○福音新報○護教○惟一○其他數十種

新著紹介

佛教管見。

時流

日本佛教界○日本基督教界○媾和以後各宗教運動○朝鮮支那宗教界○歐米宗教界
日本各宗派管長一覽表
基督教宗派一覽表
日本宗教新聞雜誌名稱、宗派、發兌日、定價、發行所明細一覽表

附錄

佛教道德　釋雲照律師
天竺の新宗教　モズムダル

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本宗教

第貳號目錄　八月出版

社説

宗教論
(一)人皆宗教の心あり(二)『我』を捐て、『大に和す』(三)眞に是れ大丈夫(四)默契にあり活事業にあり

論説

佛學の綱要　釋雲照
如何なる高僧知識といへども能く殺生戒を守る者はあらず　加藤弘之

史傳

山崎闇齋(其中、神道)　石川舜花
支那回々教の勢力と其由來　青柳猛

雜纂

參禪日誌　元良勇次郎
二祖慧可斷臂　高津柏樹
小笠原清務先生に禮道を聽く
亞細亞的宗教觀(上)
…舟先生に聞く

思潮

安心決着論　(大道叢誌社說)
佛法王法二なし　(佛教史林)
佛法を聞くに明日なし　(南條文雄氏)
義俠　(東洋基督教社說)
不淨觀法話　(雲照律師)
吾にはゆるせ　(女學雜誌閨感)
青年に警告す　(正法論社說)
四文八文の帳面　(福音新報)
福澤諭吉先生の道德　(仝)
弘法大師を觀る　(法の母)
活法論　(正法輪)
眞理は善惡の標準にして道德は眞理の光彩なり　(雲照律師)
トルストイ伯の宗教　(安部磯雄氏)
遊戲三昧錄　(田上燕庵氏)
禪と詩　(加藤咄堂氏)
佛教哲學史に就て　(井上圓了氏)
大乘非佛說論の結果　(六合雜誌)
禪學の性質　(澤永文緒氏)
倫理の進歩と日本人　(加藤弘之氏)
護國佛論　(紫堂生)
參禪の教　(禪宗社說)
內務省訓令第九號に對する神佛教界所々の感應
宗教活世界に出でよの論
諸宗合同の成否疑問
渥美契縁氏の事業　(佛教記者)
日蓮宗の臺灣布教策　(大內青巒)
戰後の宗教　(大同新報社說)
風動反響

新著批評

神道。弘法大師と日本文明。禪學講義。佛門立志史論。綴如意。"How I became a Christian."

問答

數件

雜誌評論

佛教史林。十善寶窟。禪宗。佛教。大同新報。密嚴教報。教友雜誌。同學。救世之光。法王。三寶叢誌。傳燈。日本一。正法論。明教新誌。教林。大道叢誌。惟一。六合雜誌。宗教。正教新報。基督教新聞。福音新報。護教。救世。ジャパン、エバンゼリスト。

雜誌目錄

新刊雜誌五十種要目

時流

日本宗教界。海外宗教界。

一冊八錢。郵稅一錢。半年前金郵稅共四十六錢。
大賣捌。哲學書院、東京堂、好明館、警醒社。

東京下六番町六番地
日本宗教發行所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

醫學博士北里柴三郎先生序
ドクトル佐伯理一郎先生譯補（圖畫六拾個挿入）

普通看病學

合卷洋裝全一冊　實價金九拾二錢　郵稅金八錢

上卷分本ナシ　下卷實價金五十錢　郵稅金四錢

そも婦人の學ぶへき道に就きて看病學の大切なる事は昨年來の日淸戰爭によりて普く世の人の知るところとなりぬまた婦人諸姉に於て少くともその一とはしを窺ひ置くべきの學術なる事を知り給ひぬさるにても是まで我が邦に於て出版せられたる看病學の書その數多からぬのみならず充分にその意を述べその味を含るの書なかりしはまことに斯道のため惜むべきの事なりきこゝに獨逸國にて有名なる外科の大家「ビルロート」氏の著せる普通看病學なるものありこは「ビルロート」氏のいとも深き學識と博き實驗より得たる著述にしてその親切叮嚀なると彼國に於てすら之にまさるものなきほどの良書なれは此度斯學に經驗多きドクトル佐伯理一郎氏に乞ひ之を譯して世の需めに應ずる事となりぬさて之を譯するには極めて簡明なる文章を用ゐ且つ我邦の風俗と習慣に照し合はせたれば世にありふれたる飜譯書にすぐれてめでたきものなりされば世のこの業を勸むる人とさからざる人とを問はず之を購ひ給ひて國に事あり人に急ある時はその學ふところによりて世のため人のために盡しまた常には之によりて一家の災害を救ひその健康を護り給はゞこの書を世に出したるの勞もまた酬ひられたるものと云はめ

發行元　東京本郷區龍岡町卅四番地　吐鳳堂書店

◎

發兌所　東京日本橋區馬喰町二丁目　島村利助

新渡戸稻造
笠井修子　合著

建國美談

一冊　金廿五錢

米國費府「ロベーツ」婦人嘗テ「ヰリアム、ペン」氏ノ小傳ヲ記シ家庭敎訓ノ資ト爲サント欲シ友人「ハーツホン」翁ニ就テ斧正ヲ求ム翁昨夏其稿ヲ携ヘ予ヲ北海ニ訪ヒ小廬ニ寓シ貼黄ヲ加ヘ劇賞措カズ曰ク好著宜シク一門ノ子弟ニ私スルヨリハ之ヲ世ニ公ニセバ我米人ヲ益スルノミナラズ亦以東洋ノ子弟ヲ益スルニ足ラント乃チ慫慂シテ上木セシム頃日東京笠井修子此書ヲ譯シ予ニ校定ヲ請フ披テ之ヲ閲セバ則チ善ク原文ノ意義ヲ解シ配置湊合一ニ摸倣ス反譯ノ體向ヨリ然ラサルヲ得ズト雖モ文理ノ斷續、記事ノ詳略、邦文ヲ以テ之ヲ視レバ隔靴搔痒ノ憾ナキニアラズ乃チ本傳ニ據テ取捨シ勉メテ行文ヲ平夷ニシ頗ル面目ヲ改メ以テ年少ノ子弟ヲシテ讀ミ易ク解シ易カラシム但篇章ノ分合ハ一ニ舊ニ依ル嗚呼翁ハ海外ノ一舊知ナリ而シテ二子亦一面ノ識アリ其原稿ハ則チ翁之ヲ小廬ニ刪定シ譯書ハ則チ予之ヲ潤色ス而シテ其事蹟ハ則チ平素欽慕措ク能ハサルノ偉人傑士ナリ一讀ノ下千里ノ遠友ヲ會シ隔世ノ英雄ニ接スルノ想アリ若シ夫レ氏ノ宗敎ニ關スル功績ニ至テハ嚮ニ拙著アリ世ニ行ハル此書ノ如キハ事業ノ小部分ヲ摘錄スルニ過キズ讀者全備ヲ此書ニ求ムル勿レ書成ルニ及テ其顚末ヲ記シ卷首ニ辨ス

新渡戸稻造記ス

發賣所　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

◎婦人科小兒科専門◎　東京赤坂區丹後町一番地　豐川稻荷側安藤町角　女醫　大村のぶ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

女學雜誌社出版書籍

書名	著者名	一部代金	郵税
(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵税八錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭君講	同廿五錢	同四錢
(校訂假名交)誹立比物	櫻井成明君譯	同廿八錢	同六錢
(繪さき)猫と鼠	女學雜誌社編	同四錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	同八錢	同
木村鐙子小傳	同前	同八錢	同
公娼可減	同前	同三錢	同
教育講義	同前	同七錢	同
日本女學	同前	同四錢	同
(再版)文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	横山雅男君著	同十二錢	同四錢
産婦小兒攝生法	隈越謙太郎君著	同八錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同十二錢	同四錢
俳諧史傳	小此木信六郎 布川孫市郎 兩君同著	同廿七錢	同
善惡の岐	中島とし子著	同十七錢	同
廢娼演説	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同三錢	同二錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同四錢	同
兒育草	同	同十二錢	同
藝者と手掛	淡谷小梅女著	同二錢	同
曲曲桂吾郎	阿波鳴門左衛門著	同十錢	同
高橋傳五郎	巖本善治君編輯	同五錢	同
偉人物	山月子稿	同二錢	同

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

書名	一部代價	郵税
西郷隆盛傳	卷一ヨリ卷五迄五冊 定價一圓三十五錢	一冊六錢宛
救急看護法	三十五錢	三錢
普通看護學	三十五錢	二錢
きやうと	二冊八十錢	十錢
祝ひ歌	十錢	二錢

日本宗教大取次　哲學書院◎警醒社◎好明館 東京堂◎女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	一部定價 金拾錢　一年前金 金壹圓 (無郵税)
廣告料	一行(廿七字詰)一回 金十錢　同三回以上 一割引　同六回以上 二割引 (十行以上一割引(二十行以上二割引(四十行以上四割引。但し不道徳なる廣告は謝絶す。小著の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日内務省許可
明治廿八年八月廿四日印刷
明治廿八年八月廿九日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

女學雜誌社出版書籍

書名	著者	一部代金	郵稅
(再版)小公子	若松賤子譯	一冊廿八錢	郵稅八錢
(六版)百人一首講義	鈴木弘恭君講	同廿五錢	同四錢
(附錄)誹諧立比物語	櫻井成明君譯	同廿八錢	同六錢
(畫入り)猫と鼠	女學雜誌社編	同四錢	同二錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	同八錢	同
木村鐙子小傳	同前	同八錢	同
公娼可減	同前	同三錢	同
教育講義	同前	同七錢	同
日本女學	同前	同四錢	同
(再版)文法口授	鈴木弘恭君述	同十二錢	同
婚姻論	橫山雅男君著	同十二錢	同四錢
產婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	同八錢	同二錢
邦文學	松山高吉君著	同十二錢	同四錢
俳諧史傳	小此木信一郎 布川孫市 兩君同著	同廿七錢	同
善惡の岐	中島とし子著	同十七錢	同
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 兩君同著	同三錢	同一錢
西洋女禮	本社著	同十錢	同
小供の話	同	同四錢	同
兒育草	同	同十二錢	同
藝者と手掛	炭谷小梅女著	同二錢	同
(曲)桂吾郎	阿波鳴門左衛門著	同十錢	同
(曲)高橋傳五郎	巖本善治君編輯	同五錢	同
偉人物	山月子稿	同二錢	同

發行所　女學雜誌社

本社取次書籍

書名	一部代價	郵稅
西鄉隆盛傳	卷一ヨリ卷五迄五冊 定價一円三十五錢	一冊六錢宛
救急看護法	三十五錢	二錢
普通看病學	三十五錢	二錢
きやうと	二冊 八十錢	十錢
祝ひ歌	十錢	二錢

日本宗教大取次

東京堂◎哲學書院◎警醒社◎好明館◎女學雜誌社

女學雜誌定價表

前金	一冊 定價	金拾錢
	一年 前金	金壹圓 (無郵稅)

廣告料	一行 一回	前金十錢
	同 三回以上	一割引
	同 六回以上	二割引

(廿七字詰)○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。但し不道徳なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は評決の上無代價にて引受く

送金　爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし

注文　注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年十一月十四日内務省許可
明治廿八年八月廿四日印刷
明治廿八年八月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）